

42665

教科書文庫

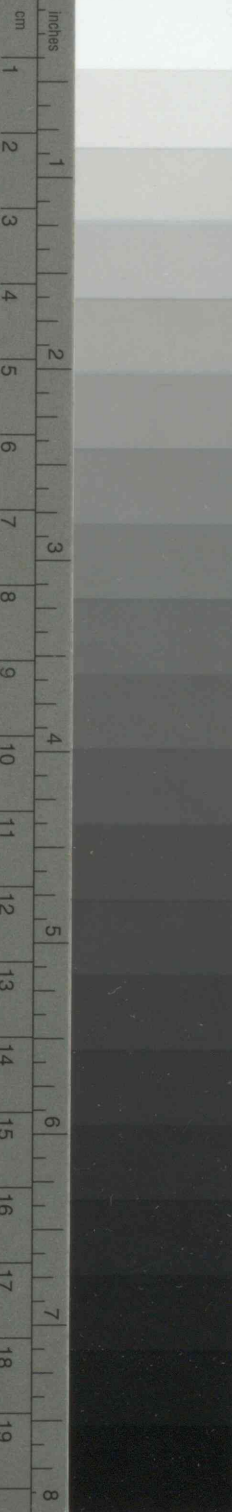
4
810
51-1904
20000 67132

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



5a
810
明37



資料室

日二月三年七十三治明

濟定檢省部文

52
810
明37

吉田彌平編



卷五

師範學校
國文教科書

東京
光風館藏版



學師範校
國文教科書卷五目錄

一	人種の興亡	島田三郎	一
○	アングロサクソン人の氣風(口語文)		
二	爲朝の軍議	本田増次郎	九
三	光賴卿の參内	作者未詳	二十三
四	妹にさとす書(書翰文)	吉田松陰	四十六
○	高根山の雷雨	徳富健次郎	五十九
五	四時のあはれ	兼好法師	六十二

六	荒れたる御堂	兼好法師	六十七
七	仁和寺の法師	兼好法師	七十二
○	これも	兼好法師	七十一
八	高名の木のぼり	兼好法師	七十三
九	青眼白眼	兼好法師	七十四
十	柑子	兼好法師	七十六
十一	懈怠心	兼好法師	七十七
○	松下禪尼	兼好法師	八十三
十二	文體論	兼好法師	八十五
十三	思ふどち(歌)	兼好法師	八十九

十四	頼山陽	朝比奈知泉	百四
十五	臣節	源親房	百二十
○	伊藤仁齋	井上哲次郎	百二十八
十六	東路の旅	源親行	百三十九
十七	俊基朝臣の東下り	作者未詳	百四十九
十八	百蟲譜	横井也	百五十七

師範學校 國文教科書卷五 目錄 終

師範學校 國文教科書卷五

一 人種の興亡

島田三郎

東西洋の交通によりて一種の恐慌を生ぜるは人種問題なり。其の初に當たりては、東人は西人を輕蔑して夷狄禽獸となし、之れを千里の外に拒斥せんとせしが、既にして彼我の形勢に通曉するや、輕蔑の念は一變して畏怖の念となり、優等の白人劣等の黄人と雜居すれば、優勝劣敗といふ自然の淘汰を受けて



首の序

明治十七年時事新報記者高橋義雄氏執筆、早稲田改良論、明治十七年、加藤弘之氏、権改良論、少シクシテ打込

黄人絶滅せん」と唱ふる者あり。此の説や西歐の學を修め學界に相當の位置を占むる者の口に出でたるがために、衆人の心を動かして一時信用せられたり。而して之れを事實に應用すれば、東西人種の雜居交通を永久に拒むべき論結をなさざるべからず。是れ事實に於いて行ふ能はざる者なり。然れども、事實と理論と並び立つ者なるが故に、雜居は勢行はざるべからず、而して我れの劣敗に歸著する理ありとせば、我れの前途は豈實に悲しむべきにあらずや。是れ今日に於いても、理論上考究を要する問題なり。

予が見る所によれば、文明の程度非常に懸隔する異人種の雜居は勝敗の結果を生じ、強弱の差異非常に懸隔する異人種の雜居も亦同一の結果を生ずべし。然れども、これらの懸隔甚だしからざる異人種雜居して、特に其の現在の劣者が優者の長所を未來に吸收採用すべき素質冀望あるに於いては、今日の劣者却つて優者に追隨するを得て、他日或は駕して其の上に出づる利益あらん、徒らに人種の區別を劃して畏怖索居せば、却つて進歩の機會を失はんとす。是れ予が日本國人として、歐米人の雜居を怖れず、天下

の大勢に駕して此の機運を利用するに、銳意なる所以なり。

空言は益なし、是れを實例に徴せん。米洲、南洋の土人が歐人と雜居するや、歐人は繁殖して土人は減少す。是れ其の文明の程度懸隔して生活、工藝、衛生、學術、一切の事、劣者が優者に學ぶ能はず、生存の道曾て進まざる結果に外ならず。然れども、唯人種の區別に因つてのみ人口の増減を測ること能はざる者あり。亞弗利加の黒人、米國に雜居するや、其の生存の方法、故土に居るが如くならず、却つて歐人種の衣服

飲食を用ふ。其の結果、黒人の繁殖は故土に於けるよりも多く、特に奴隸解放の後に及んでは、其の増加一層の速度を加へたり。是れ豈異種雜居問題を解釋するに當たりて、一考を要すべき事實にあらずや。

黒、赤(米洲土人)二人種を比較するに、黒人は魯鈍、赤人は慄悍、智勇の點に於いては赤人優にして黒人は劣、而して赤人減少して黒人増加するは何ぞや。赤人は白人を敵として一切の長所を採用することなく、自ら劃して故態に執著し、黒人は之れに反して白人と狃れて生活の新法を採用し、心性著しくは開發せ

利用厚生、書經ニハ徳利用
厚生トアリ、日用ノ道具ヲ創
作シ運搬スルヲ利用ニテ衣食
住ノ道ヲ滿スルハ厚生ナリ

テニ是

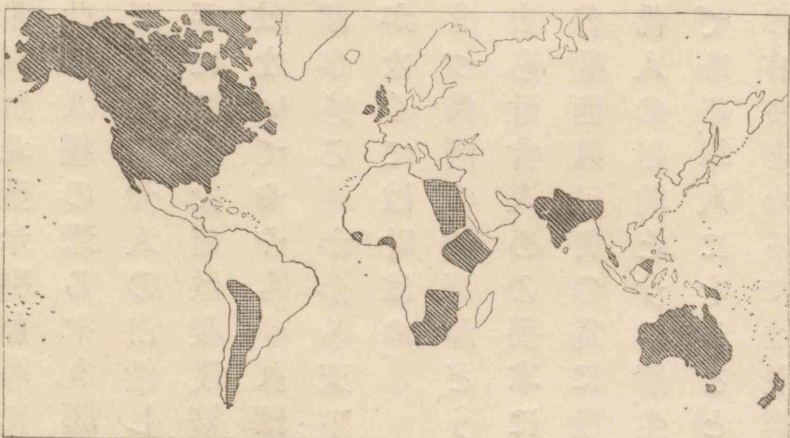
榛莽、榛ニ雜木莽ニ雜
草ナリ

られざれど、農工商の諸業に服し利用厚生の道に由るがためなり。予は或論者の如く、人種を以って盛衰を解釋せんよりは、寧ろ社會の境遇を參酌して人種の興亡を論ぜんとして欲する者なり。往古埃及の盛んなるや、現今歐洲を占領する白人は榛莽の間に禽獸を逐へる野蠻なり。埃及の王廷は四方の貢物を納め、威勢遠近を風靡したり。其の遺蹟の牆壁を見るに、黃白赤の異人種が天産人造諸種の貢物を獻ずる繪、儼として今に存す。其の赤色は埃及人にして、黃は亞人、白は歐人なり。顧ふに、四千

年以前、埃及人が黃白の異人種を見るに如何の眼を以ってせしぞ。今日の支那人は歐人に輕蔑せらるれど、漢の盛世に當たりて支那に入りし羅馬人は今日と尊卑を顛倒せしこと知るべし。今日、我が國人は歐人を崇拜し、其の極畏怖の感を懷けど、織豊徳川諸氏が西班牙、葡萄牙、荷蘭諸國人を遇せし當時は如何なりしぞ。蓋し、其の勢威熾んなる者は黃白人種の別なく、尊貴の如くに見え、之れに反する者は自然野卑の状に見ゆ。今日文運未開の爲に黃人種を以って劣敗の天命ありと速斷するは、予れ其の説の無

佛蘭西の社會學者ドモランが數年前に出した著述で、忽ち佛國の讀書社會を風靡したのは「アングロサクソン人の天下に雄飛する所以」と題する書物である。佛蘭西で既に數十版を重ねたのみならず、英語に翻譯した方も盛んに英米に行はれて幾版か重ねて居る。日本の學者、教育家、政治家などに之れを讀んで居る人も少くない。

抑、此の書物は、アングロサクソン人たる英人か米人かが國自慢、人種自慢に書いたものでなく、人種を異にし利害を異にして居る、謂はば反對者、競争者たる佛人の著したものであるから、一段面白い。佛國がその教育や社會や家庭の組織、制度を改めないで、從來のまままで進行すると、世界の競争場裏で佛人は段段劣敗の地に陥り、アングロサクソン人のみが優勝の一人舞臺を占めるであらうとの考を述べたの



アングロサクソン人の勢力地圖
(アングロサクソン人の勢力地圖)

であるが、決して一時の慷慨談でなく、數十年の研究觀察を積み、わざわざ英國其の外へ出かけてよく取調べた結果である。此の本の開卷第一に掲げてあるのは一枚の世界地圖で、其の中にアングロサクソン人の占有して居る土地、即ち英國、北亞米利加、南亞弗利加、印度、濠洲をはじめ、其の他無數の島嶼にするしをつけ、又其占領する所とならんとして居る、謂はゆる勢力範圍の中に落ちて居る南亞

米利加、北亞米利加等にもしるしをつけてある。一見して此の人種の恐るべき膨脹力がわかる。從來佛蘭西人、西班牙人、葡萄牙人の占領して居た所で、アングロサクソン人の手に渡つた處は段段繁昌する、さうでない處は國勢一向振はないで、ややもすればアングロサクソン人に侵蝕される傾がある。かかる天下の大勢には何かしつかりした理由がなくしては叶はぬ。

まづ佛國の教育がどういふ有様であるか。教育の制度は自ら社會人心の要求に應じて割り出される道理であるが、佛蘭西人は何の爲に教育を受けるのであるか。教育ある佛人の目的とする所、生涯の大望とする所は役人になる事である、軍人になることである。軍人はまづ別にして、政府の官吏となるには、登庸試験に及第せねばならぬ。一旦及

第して採用され官吏となつた以上は生涯安心である。年限をきめて官等や俸給があがる、老年になれば年金も頂戴できる。唯長官の命に服従して仕事さへすればよい、何の危険も何の苦心もない。これほど樂な商賣はない。そこで官吏の候補者は無數であるが、農工商などの實業は賤しんでいやがる。社會一般も官吏を重んずる、官吏ならば持參金澤山の妻も来る。政府の保護と細君の持參金、人と生まれて官吏とならぬは恥であるといふ勢となる。そこで學校は謂はゆる詰込主義で教育する。なんでも短い年月の間に成るべく多くの事を學んで、試験に及第しさへすればよいといふ事になる。試験合格者を多く出した學校は盛んになり、然らざるものは門前雀羅の有様となるから、教師も成るべく及第請負的の講義をする。學問の爲に學問

門前雀羅
漢書鄭當傳傳二下邦
翟公廷尉上や家
宏亮獨然と云々、解官セ
ラレ、門前雀羅ヲ張ルニ
至ルト、則チ誰モ訪マセズ
甚附シキト、

をするといふ研究的態度はとんとなくなつて仕舞ふ。學問速成受験請合といふ學風は、それ相應の著書を産み出す。近來佛蘭西に大著述の出た事はない、みな速成的受験的の雜本である。

さて、受験者幾千萬の中に登庸せられるものは極めて少數である。候補者が多くなれば多くなる程、試験の程度を高くする、落第者、失望者は年年増加する。三年も五年も十年も目的を達せない人が大多數であらうが、その時になつて外の職を求めようとしても、時期既に遅しである。

一言でいへば、佛國今日の氣風は、政府、門閥、家系、細君の持參金などに依頼する方が多くて、獨立自營の氣力も、意志も、體力も、技藝も、養はぬものである。一國を擧つて悉く寄生蟲の状態に甘んじて居る。

英人の氣風、英國の學風は之れに正反對である。特に著者が最も感じたのは、英國にある植民學校である。山林田野を友とする處に建ててあつて、實用の學科を一日四五時間授ける外に、游泳やら、乗馬やら、病人の看護やら、靴足袋の手繕ひやら、すべて未開蠻野の國へ移住して、特立獨行で自家の運命を開拓するに必要な氣力、體力、意志、技藝を練るのである。それで、學校に來る生徒は中以下の人ではなく、中以上の資産名望ある人の子弟が、多分の學資を投じて來るのである。英國人は飽くまで實際的の國民で、學風や教育も自然活用を本とし、獨立自營といふ事を決して忘れぬ。親が官吏、軍人であるから、子も官吏、軍人にしよう、ならうなどといふ考は毛頭ない。農工商何の恥づかしい事があるか、世界何れの國へ踏み出すとも何の恐ろしい事があるか、

政府や門閥や權勢に依頼するこそ男子の恥辱である、大敵であるといふ意氣込みをもつて居る。だから、子供を教育するにも、親の都合や便宜の爲に教育するのでなく、子供そのものの發達を目的として教育する。同級生との優劣を比較して競争嫉妬するやうなけちな考をもたせず、前よりは能く出來たとか、出來ぬとかいふ評を下して、生徒が一日一日に其の人格の發達したかどうかを考へる様にする、己れの人物の成長を樂しむやうにさせる。それゆゑ、子供の時から子供あしらひにせず、なるべく人間として取り扱ひ、外より信任して自ら重んずる心を起こさせる。早く實務に當たらせ、活動を獎勵し、手工、技藝を授けて、腦や口ばかりでなく、又腕や脚のきく人にする。萬事を命令的服從的にさせないで、勸誘的にして、意志と氣力との

發達を求める。最も大切な事は親に依頼する心を少しも起こさせぬ、親の地位や財産は子に何の關係もないものである、子供の受けた教育こそ唯一の資本で、それでもつて自由自在に天下を雄飛するのだと覺悟させるのである。然らば、家庭はどうであるかといふに、これにも英佛雲泥の差がある。實際、英語のホームといふ詞を譯す佛語がない位で、英國ほど家庭の眞意義の行はれて居る所はない。佛蘭西の家庭といふは一個の建物である、其の建物のある所の地面である、交際につかふ一種の道具である。客間と玄關だけは立派にしても、家族の快樂に供するものは至つて少ない。一家團欒の樂しみが薄いから、主人は外へ酒を呑みに行く、細君は外へ舞蹈にゆく。大禮服や馬車や交際の道具はあつても、妻と共に相樂しみ相和らぐ機會は至つて

少ない、子供は家庭の訓練をうけずにはやく寄宿舎にはひ
つてしまふ。

英國人は家庭を愉快にする事に全力をつくすといつても
宜しい。中以下の身分のもので、餘財が出来れば絨毯を
かふ、窓掛をかふ、ピアノかオルガンの一臺も買ひ込むとい
ふ有様で、家庭は彼れらの獨立國である、ホームは自由獨立
の城廓である、何人にも之れを犯させない本城である。此
の家庭は家でも土地でもない、獨立自由の存する處、一家團
欒の樂しまれる處ならば、亞弗利加の中心でも、印度の邊鄙
でも、即ち家庭のある處である。英人は子孫の爲に貯蓄す
るといふ事が割合に少ない。生命保險や火災保險にさへ
はひつて置けば、不時の事があつた時狼狽しないですむ。
そのあとは悉く一家の樂しみ一身の修養に用ひる。前言

つた通り、子供が親の遺産をあてにしないやうになつて居
るから、稼ぎ出したものは悉く子供の教育や衣食住の快樂
につかつてしまふ。子孫のために財を積むといふ事は、高
尙な獻身的の考ではあるが、それよりは自身で儲けたもの
が今身につくといふ方が、中以下の人を働かせる動機にな
りやすい。

然らば、英國人は儲けただけ皆食つてしまふ向かう見ずで
あるかといふに、なかなかさうでない。少しも他人に依頼
せず、己れの腕一本で作りに出した家庭であるから、妻子に對
しても、家財道具を見廻しても、肩身が廣い、天地に俯仰して
疲ましい所がない。そこで、自ら自重自尊の心が起こつて、
一身一家の尊嚴を保つことになる。己れは即ち自家の運
命の開拓者であるから、これからさき勉めさへすれば、何處

までも自身の地位を進めて行くことが出来ると思つて居る。だから、商家の番頭や鑛山の坑夫までが、大學普及講義（ケンブリッジやオクスフォード）に就學することの出來ぬ人に、處處で高等の學術講義を聽かせて、大學教育の恩澤に與からせる組織に出席するため、其の日の業務を終へてから、二里も三里も往復するものが澤山ある。小成に安んぜず、自家の修養に怠らぬから、英國には下等社會らしい人が段段少くなる。坑夫や番頭も、其の身なりに於いても、宛然一個の紳士である。英國のある貴族はいつも下等の汽車で旅行する。「これは金の節儉のためではない、下等汽車に乗り込んで居る人が皆紳士であつて、貴族と相並んで耻づかしからぬ人人である、毫も下等車に居る心地がしない。だから、上等客車などは廢止するがよい」といつたさうである。

が、ともかくも、自營獨立の氣風が人の品格の上に及ぼす影響をこれで推すことが出来ると思ふ。

社會一般の風も同様の傾向で、佛蘭西や其の外の國では、國家を中心とし政治上の功名を中心とする愛國心が行はれ、獎勵されて居るが、英人は然らず、個人の獨立を基礎として居る愛國心に動かされて活動する。前者であると、萬事國家から割り出すから、政府や軍隊は盛んになるが、人民は依頼心を生ずる。政府に頼り政府にすがらなくては、功名も富貴も得られぬから、なるべく自國にかぢり附いて外へ踏み出さぬ。政治上、軍事上の功業を以つて國威を發揚しようとはばかり考へるから、農工商の如き仕事は自然賤しむ、國家は頭大振はざる有様となる。

アングロサクソン人は自國へ還らうといふ考を毛頭もた

ずしてどんだん外國に移住植民する。植民地は母國に對して獨立の姿である。母國に對する敬意から本國政府を戴いて居るが、實際は自治同様である、軍政よりも實業の方を大いに重んずる。

國際間の争を仲裁會議に付して、なるべく戰端を開かぬやうにするのは英國人の特點である。戰爭をして負けければ勿論のこと、勝つても利益にならぬ事をよく知って居るのである。要するに、個人の獨立自由を基礎とする愛國心は、富力の増進を促し、道念の標準を高くし、人種の世界全面に擴布することを助ける。

以上は、ドモランの著書の大要をかいつまんで述べたつもりである。此の説を一概に丸呑みにして騒ぐこともいらぬが、ともかく、慎重に熱心に考究すべき問題は其の中に籠

もって居る。

東洋の英國と人にも謂はれ自らも任じて居る日本國は、四面皆海といふ島國である所が英國に似たばかりではないか、ドモランの見た英國人はまるで今日の日本人とちがふ様に思はれる。子は親に依頼し、親は子をあてにし、女子は男子に、人民は政府に依頼する、我れも人も汲汲として外國の文明や勢力に依頼し畏怖する様な國民が、もし此の地球上にあつたら、それが世界に雄飛する大國民となられようか。アングロサクソン人の何ものたるかを見て、自ら警むべきは獨り佛蘭西人ばかりではあるまい。國士

二 爲朝の軍議

作者 未詳

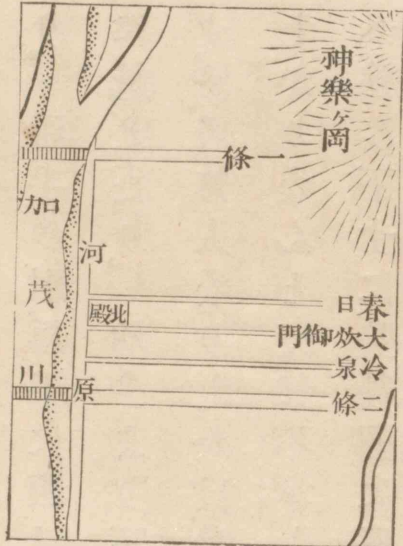
保元物語一節、
保元物語、保元、乱、天、平、の
亂、を、ミ、ミ、ミ、鎌、倉、中、法、以、所、
一、若、作、り、作、者、存、在、す、る、異、論、
下、葉、室、大、納、言、時、長、作、り、
信、濃、所、使、行、長、著、と、す、

齋院、延和、嵯峨、平、左馬廐之助也
 平馬助也。平、左馬廐之助也
 長男、長憲、次男、忠綱
 三男、正綱、四男、通綱
 以上、子父多し
 大夫、五位、通稱、但、傳、時代
 二、至、六、代、迄、一、言、ト、ナ、リ、ナ、リ
 為、我、父、子
 四、部、左、門、秋、實、五、郎、攝、部、秋、神
 此、茂、子、郎、為、宗、七、郎、為、宗
 九、郎、為、仲、以上、人

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて参り給ふ。白河殿より北河原より東春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東面に門二つあり。東の門をば、平馬助忠正承りて、父子五人並びに多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば、六條判官爲義承りて、父子六人して固めたり、その勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附きて、多分は内裏へ参りけり。

ここに鎮西八郎爲朝は、我れは親にも連れらるまじ、

兄にも具すまじ。功名不覺も紛れぬ様に、只一人いかにも強からん方へ差し向け給へ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり」とぞ申しける。



依って西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承って子供具して固めたり、其の勢百五十騎

とぞ聞えし。抑爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武

梟惡鳥親之食トモ鷹鳥ヲ
トモト云フ

左京東
左京西
左京南
左京北
左京東
左京西
左京南
左京北
左京東
左京西
左京南
左京北

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身。依宣旨執達如件。

然れども、爲朝なほ參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、親の科に當たり給ふらんこそ淺ましけれ。其の儀ならば、我れこそいかなる罪科にも行はれんずれ」とて急ぎ上りければ、國人共も上洛すべき由申しけれども、大勢にて罷り上らんこと、上聞穩便ならず」とて、形の如くに附き従ふ兵ばかり召し具しけり。依って去年より在京したりし

を、父不孝を赦して、今度の御大事に召し具しけるなり。

爲朝は七尺許りなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色色の絲を以って獅子の丸を縫ったる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以って威したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打ったるを著るままに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にて鋤打ったるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲も斯くやと覺えてゆゆしかりき。謀は張良にも

大荒目 礼大荒目ナリ
大佛小礼ニ程着
目ナリ

樊噲 樊噲高祖劉邦名臣
方高祖樊噲は二張良韓
信蕭何、陳平、及猛將樊
噲、等、秦ヲモシレテ有
關、仲ニハ楚王項羽其臣
范增、我ヲ用ヒ、鴻門ニ會ニ、
二劉邦ヲ害セシム、樊噲進ニ
出テ、テ勇ヲ示シ、事ヲ止メ、リトテ

史記
孫子兵法

吳子孫子戰口陣代軍略
孫子兵法
孫子兵法
孫子兵法

劣らざれば、堅き陣を破ること吳子孫子孫子兵法が難しとす
る所を得、弓は養由をも耻ぢざれば、天を翔る鳥、地を
走る獸、恐れずといふことなし。上皇をはじめ參ら
せて、あらゆる人人、音に聞こゆる爲朝見んとて舉り
給ふ
左府すなはち合戰の趣き計らひ申せ」と宣ひければ、
畏まつて爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ど
も從へ候ふについて、大小の合戰數を知らず。中に
も折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて
強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅ぼすにも、皆利を

折角合戰 骨折合戰

得ること、夜討にしくこと侍らず。然れば、只今高松
殿に押し寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はん
に、火を遁れんものは矢を免るべからず、矢を恐れん
者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくくも候
はず。但し兄にて候ふ義朝などこそ駈け出でんず
らめ、それも真中さして射通し候ひなん。まして、清
盛などがへろへろ矢、何程の事か候ふべき、鎧の袖に
て拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸、他所へ成らば、御
赦されを蒙つて御供の者、少少射んずる程ならば、定
めて駕輿丁も御輿を捨てて逃げ去り候はんずらん。

心にくくも候はず
心服をまもる

其の時、爲朝参り向かひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け参らせんこと、掌をかへす如くに候ふべし。主上を迎へまゐらせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずる許りにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候ふべきと憚る所もなく申したりければ、左府爲朝が申す様、以つての外、荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討など云ふ事、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが、主上、上皇の御國争ひに、源平數を盡くして兩方に在つて勝負を決せんに、むげに然るべからず。其の上、南都の衆

興福寺、鎌足山科、建基寺、
子ヲ奈長三郎、トモ山科寺
トモ山科寺、
指矢、遠射用、矢ニテ、
併ト見羽ヲ用キ、
指矢三町、遠矢八町、
利ノ得ナリ、
富家殿、忠實公、

院司、上皇前司、別當執事、
年、院殿上、判官代、典主代、
廳司等、官ナリ、

公卿、公三、公五、改左大臣、
卿三位以上、兼議上、

先蹤、先例、使政、

徒を召さるることあり、興福寺の信實、玄實等、吉野十津川の指矢三町、遠矢八町と云ふ者どもを召し具して千餘騎にて参るが、今夜は宇治に著き、富家殿の見参に入り、曉是れへ参るべし。彼れらを待ち調へて、合戦をば致すべし。又明日、院司の公卿、殿上人を催さん、に、参らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること、兩三人に及ばば、残りなどは参らざるべきと仰せられければ、爲朝、上には承伏申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士にこそ

衣冠 冠 襪 指貫 (好袴と云)

元下部 服装をとりかへ
エ下部 事とん

聲高き前掛ヲカキト

上臈 仙家夏衣を自ら臈称
テ一心不亂と修業人ヲ臈ヲ電キ
タルモノヲ臈上臈と云フヨ
リ公家ノ三位以上ヲ上臈ト云
以下ヲ下臈ト云フ事ト身
ノヨレテノ意モ用フ。

まひ、めのとごの桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ、雑色
の装束に出て立たせ「自然の事もあらば、人手に懸く
な、汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ」とて御身
近く置き、その外、清げなる雑色四五人召し具して、大
軍陣を張りて處處門門を堅く守護しけるを事とも
せず、さき高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大
いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。
紫宸殿の後を経て殿上を廻りて見給へば、信頼卿一
座して、その座の上臈たち皆下にぞ著かれたる。光
頼卿こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふと

しにかたし(乱ル、ミヤキキ)

遠慮会釈ナリ也

エモ
又教ヲ臈ヒ、襟正レ指ヲ
直キナリ。
気色 色代

も、かれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著
くまじきものを」と思はれければ、左大辨宰相長方卿
末座の宰相にておはしましけるに「今日の御座席こ
そよにしどけなり見え候へ」と色代して、しづしづと
歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。
光頼は信頼のためには母方の叔父なる上、大力の剛
の人なれば、殊に恐れて見えられたり。右の袖の上
に居懸けられて、伏し目になりて色を失はれければ、
著座の公卿あな浅ましと見給ふに、光頼卿、下重の尻
引き直し、衣紋繕ひ、笏取り直し、氣色して「今日は衛府

督が一座すると見えて候ふ。召しに参ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて、参内するところなり。抑、何事の御説ぞと問ひけれども、信頼物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして兪議の沙汰もなし。程經て、光頼卿つい立ちて「悪しう参つて候ひけり」とて、しづしづと歩み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて「あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人

一人もおはしまさざりつるに、格段しいだしたることよ。

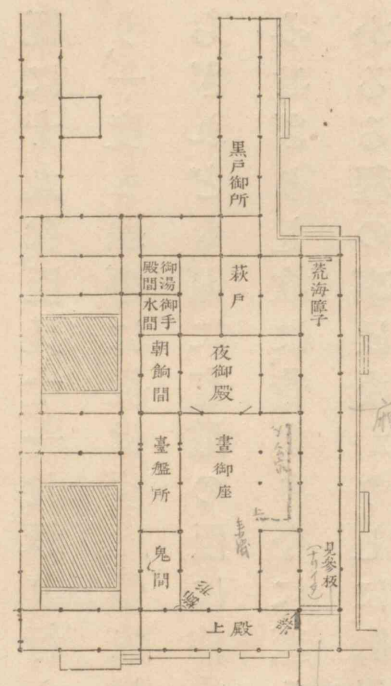
門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからんと申せば、傍なる者の「昔、頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき、その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし」といへば、又傍より「など、その頼信をうち返して信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ」といへば、「壁に耳、天に口」といふことあり、恐ろし、恐ろし。聞かじ」といひながら、皆、忍笑に笑ひけり。

頼光、源氏、頼山陽、一系、三系、後一系、土佐、一系、一系、頼信、一系、三系、一系、一系、赤松、四系、一系、一系、一系

小部 殿上向は柱敷を向
 壁二尺四角位、柱と圓ヲ附テ
 陛下が空窓見覺三九ギ小
 窓上も三ノレシ
 見糸の板、荒海障子、相目多
 ニツ段ヲリテ見糸者、相目多
 踏、高島、藤、作、クワリ
 見糸ニニ義アリ現券ノ者ト
 拜指トナリ。
 荒海障子、実立ニシテフスマニ
 表ニ荒海上手長、長尺ヲ画
 裏ニ字板、細尺、絵ヲ画
 ルモノ申テ障子ト明障子ト
 テノクサト障子トフスマナリ
 萩のフスマニ萩ヲ画ナモノ

光頼卿かやうに振る舞ひ給へども、急ぎでも出でら
 れず、殿上の小部の前、見参の板、高らかに踏み鳴らし
 て立たれたりけるが、荒海障子の北、萩戸の邊に、弟の
 別當惟方のおはしけるを招き寄せ宣ひけるは、公卿
 僉議として催されつる間、参じたれども、承り定めたる
 こともなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人
 數にてあなる。傳へ承る如きは、その人、皆、當時の有
 識、然るべき人どもなり。その内に入らんこと、甚だ
 面目なるべし。さても、先日、右衛門督が車の尻に乗
 っつて、少納言入道が首實檢のために神樂岡へ向かは

れけることはいかに。以つての外、然るべからざる
 振舞かな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重
 職なり。その職
 清涼車に居ながら人の
 涼車に乗り給
 殿ふこと、先蹤もい
 まだ聞き及ばず、
 當時も大いに耻辱なり。中んづく、首實檢は甚だ穩
 便ならずと宣へば、別當それは天氣にて候ひしかば
 とて赤面せられたり。



天氣
 天皇、恩在也

光頼卿重ねて「こはいかに、勅説なればとて、いかで存
 ずる旨を一議申さざるべき。我れらが曩祖勸修寺
 内大臣、三條右大臣、延喜の聖代（之方）に仕へてより以來、君
 既に十九代、臣又十一代、承り行ふ事は皆これ徳政な
 り、一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあ
 らざれども、偏に有道の臣に伴なつて讒佞の輩に與
 みせざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもど
 かるる程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に
 語らはれて累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべ
 し。大貳清盛は熊野参詣を遂げずして切目の宿よ

家柄ノ宜キト
 清華ノ家 根柢ノ家
 七臣上ノ家

非難

り馳せ上るなるが、和泉、紀伊、伊賀、伊勢の家人ら、待ち
 受けて大勢にてあなる。信頼卿が語らふところの
 兵そこばくならじ。平家の大勢押し寄せて攻めん
 には、時刻をや廻らすべき。もし又火などを懸けな
 ば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地
 となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに
 いはんや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王
 道の滅亡、この時にあるべし。右衛門督は御邊に大
 小事を申しあはすところきこゆれ。相構へて、相構
 へて、隙を伺ひ、玉體恙なくおはします様に思案せら

黒戸御所 清涼殿より山椒殿
へ行ふ廊下也

現在を

念 主上は朝御伊弉册奉
りたまへ

るべし。さて主上は何處におはしますぞ。「黒戸御
所に」。「上皇は」。「一本御書所に」。「内侍所は」。「温明殿
に」。「劔璽は何處に」。「夜の大殿に」と左衛門督次第に
尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。
又朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは
何者ぞと宣へば、それには右衛門督住み候へば、その
方様の女房などぞかげろひ候ふらんと申されけれ
ば、光頼卿聞きもあへず世の中は今ばかりござんな
れ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君を
ば黒戸御所に遷しまるらせたり。末代なれども、さ

未代、公宿、仏道、直徳、頼康
ヲ未代ト云

王法、佛法、世間道、俗門ヲ
云

正八幡宮、仏名、正観音、討テ不
能、坐、作、八幡ヲ云、
觀音、三子、作、母、坐、
ニ形、変、テ、衆、生、濟、度、
ヲ、カ、ク、玉、ト、云、而、シ、
其、本、作、正、観、音、ト、云

のろしげに

すがに日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、
正八幡宮は王法をいかが守り給ひぬるぞ。異國に
はかやらの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの如
き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かなとて、のろ
のろしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は「人もや
聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、か
つは悲しくて、われいかなる宿業に依って、かかる世
に生まれ合ひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由
にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は耳をも
目をも洗ひぬべくこそ侍れ」とて、上の衣の袖絞るば

宿業、前世業因也
許由、箕子、南、楚、三、無、欲、ヲ
云、周、王、由、三、時、堯、皇、帝、
臣、ト、世、襲、セ、シ、ト、云、大、婦
ト、云、リ、テ、許、水、ニ、耳、ヲ、
流、テ、所、へ、樂、文、ト、云、衆、生、
牛、ヲ、追、テ、来、リ、コ、ト、見、故、ヲ
向、テ、樂、食、テ、皇、ト、云、年、
ヲ、濟、シ、リ、ト、云、泉、父、聞、キ、
コ、レ、テ、流、公、川、ヲ、流、ル、ト、云、
膽、上、流、ニ、逆、リ、テ、渡、ル、ト、云、
史、記、白、青、傳、ニ、見、ユ

釈迦の八十年間解ん教、三門人同難得者、三法結集、三法増進、三藏、三昧、三昧、一部、八卷、世人、知らず。

委細申し進ずべく候。拙者いまだ観音經は讀み申さず候へども、法華經第二十五の卷普門品と申す篇に、觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目にかかり候へば忽ちぶつぶつと繩が切れ、人屋へ捕らはれ候へば忽ち錠鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんじに折るるなど、申してこれあり候。これは、拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰り返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。さりなが

大乘小乘、業、運載、義、乘、上、下、根、人、之、説、高、妙、深、遠、理、大、乘、三、法、通、俗、的、一、聲、聞、統、統、ヲ、説、ケル、小、乘、經、ナ、リ、ト、上、根、下、根、根、ノ、所、説、ニ、テ、生、レ、モ、也、生、レ、モ、優、レ、モ、ト、花、ト、由、リ、ナ、リ、ト、カ、リ、ト、

ら佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘小乗と二つに分かちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗にて申し候へば、觀音は



吉田 松陰 (藏三)

右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむること、に御座候。これは大いに信を起こさずる爲なり。信を起こすとは一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なき事にて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心

不亂になりだにせば、何事に臨み候うても、ちつとも頓著なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候ゆゑ、世の中に、如何に難題苦難の來たるとも、それに退轉して、不忠、不孝、無禮、無道等仕る氣遣ひはなし。されど、初めより凡夫に、一心不亂の、不退轉のと申し聞かせても、少しも耳に入らぬもの故に、假りに觀音様を拵へて人の信を起こさせ候教に御座候。これを方便とも申し候。さてまた、大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申し候うても、立身出世など申

す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては、吾が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては、吾が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木のかれたるまでに悲しみを發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまざると志を立てて、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るる修行をしに參られ候。さ候うて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るる事を悟り、生まれもせねば老いもせず、

山三入り下、仙教ニ説く
 十才三才山入り十年ヲ經テ
 孤山トモ世才三才ニテ年竹葉
 不トモ云。山六餘羅及喜
 提山(尼連禪河東岸)

病みも死にもせぬ事を悟つて出て来て、それより世の人を教化せられたり。これが即ち出世法なり。故に、出世せねば濟世の出来ぬと申すも、この事なり。濟世といふは即ちこの世の人を濟度する事に御座候。さて、その死なずと申すは、近く申さば、釋迦の孔子のと申す御方は今日まで生きて居らるる故、人が尊みもすればありがたがりもし、恐れもするなり。はたして死なぬにはあらずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りにはあらずや。楠木正成とか、大石良雄とか申す人は、刃もの

漢書之三王傳「禍福如繩」

塞公初王師長城、近之任馬、好
 三王在馬、若昔、有、此、或、日、馬
 才、失、之、若、人、見、舞、之、三、至、此
 才、失、之、禍、福、種、上、高、毛、慶
 へ、か、ミ、ラ、ケ、ル、ニ、カ、馬、ハ、巴、ト、等、キ
 在、馬、ヲ、多、ク、連、レ、セ、レ、リ、エ、ラ、見、セ
 人、々、集、リ、来、テ、公、初、を、幸、福、ヲ、祝、シ、テ
 リ、セ、レ、バ、禍、ヲ、長、ク、シ、テ、ラ、イ、ト、シ、タ
 所、ハ、翁、婿、ヲ、亦、馬、ヲ、好、ム、亦、ウ、一
 百、萬、馬、ヲ、手、ヲ、折、リ、タ、リ、セ、ド
 毛、初、ハ、此、マ、カ、第、三、葉、ハ、驟、ノ
 權、必、ク、幸、福、ノ、門、ト、シ、云、ヘ、ウ
 亦、此、年、回、ニ、幸、起、リ、テ、通、國、ノ
 壯、丁、皆、官、場、ニ、或、ハ、死、或、創、
 ケ、リ、サ、レ、ド、公、初、ハ、亦、手、ヲ、折、リ、
 辰、ヲ、シ、ル、絶、第、三、長、ク、マ、リ、ト、シ、

に身を失はれ候へども、今以つて生きて居らるるなり。即ち刀のちんじに折れたる證據なり。さてまた、禍福如繩といふ事を御さととりなるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出来、己れの爲、人の爲、後の世へも残り、かつ死なぬ人人の仲間入りも出来候へば、福この上もなき事に候。人屋を出て候へば、また如何なる禍の來んや、知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候

所詮(所詮能詮トテリ所ハ定身能ハ使役也)宛竟(意)

へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。なんの効験もなき事に、観音に頼みて福を求むるやうの事は、必ず必ず無益に存じ候。尤も右の通りに申し候へば、身勝手なる申し分、不孝なる申し分と御存じあるべきか、ここにまた論あり。易の道は満盈と申す事を大いに嫌ふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶を語ナリ芳は夭折、敏は啞子、右やうのあしざまなるものなれど、あと四人はいづれも可なり。世を渡られ、特に兄様、そもじ、小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七

易ノ謙卦傳
天道虧盈而益謙
地道變盈而流謙
鬼神害盈而益謙
人道惡盈而損謙
謙ハ事ヲヒカメニスレテ也

人も兄弟のある家を見くらべよ。これ程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にては、高須などにては、兄弟の内にはあろき人も随分あるなり。然れば、父母兄弟の代はりに拙者、芳、敏の三人が禍を受くるにこそと御思ひ候はば、父母様の御心も濟まるる譯には候はずや。かつ、杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却って杉が氣遣ひなるものなり。拙者身の上は前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は随分あれど、杉は今にては御父子とも

父は部吏、兄は横枝吏
(言平士令、平内月海位、當)

御役にて何の不足もなき中なれば、子供らがいつもこの様なる者と思ひて、昔山宅にて父様母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても、眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣ひなるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを、人はめてたし、めでたしと嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬゆゑ、始終稽古場にかがみて人の知らぬ處にては、ひとり落涙したる程の事なりき。もしや、萬一、小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、

山宅 萩城東、護國山麓

杉の家も危し、危し、父母様の御苦勞を知って居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてさへ山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして、久坂などは猶以つての事。されば、拙者の氣遣ひに觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間へ「樂は苦の種、福は禍の本」と申す事をとくと申し聞かする方が肝要なり。なほまた、一つ、拙者不孝ながら、孝に當たることあり。兄弟内に一人にてもいかさまのわるき人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦ましくなるものなり。これより、拙者は兄

弟の代はりにこの世の禍を受け合ふゆゑ、兄弟中は拙者の代はりに父母へ孝行してくるがよし。さすれば、つづまる所、兄弟中皆よくなりて、はては父母様の御仕合はせ、また子供が見習ひ候へば、子孫の爲これ程めでたき事はなきにはあらずや。よくよく御勘辨候うて、小田村、久坂なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、をりをり御見候へかし。心學本に、

のどけさよ、ねがひなき身の神まうで。

神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。俗簡襍集

心學本 石田勘平(福巖)著
 神佛儒道科ノ後キコレトシテ
 通俗ニ流クイテ流ニ手島瑞庵
 株田鶴翁布施和箱トト島南
 二葉和紙文訂若心此書也
 俗簡襍集 松陰手簡集ノ後
 義助ノ集 三和 田中洪武撰出

○ 高根山の雷雨

徳富健次郎

今年五月中旬、余は伊香保の西方に聳ゆる高根山の絶頂に、草を藉いて坐し居たり。

前には、大壑^掲拗然として巨口を開けり。壑を隔てて、左手に榛名富士聳え、右に烏帽子が嶽聳ゆ。二山の間、纔かに匹練を露すは榛名の湖水なり。湖のむかふには、掃部が嶽鬢櫛が嶽等やや低く水を限り、烏帽子が嶽の右には、信越境の連山雪を帯び、波濤の如く天際に横たふ。

近き山山何れも紫褐色の肌膚をなせるが中にも、轟然として大壑より骨立する烏帽子が嶽、絶巔は束立せる巖より成り、風雨雪霜に刻まれし山膚は幾條の溝をなして、折しも五月中旬の事なれば、春は山中にも來たり、山面山腹の巖溝に生ひたる櫛の類は青葉の衣を著け、さながら幾頭の青龍の

蜿蜒として山を下るが如く、また緑の瀑布の漲るに似て、榛名富士の裾より落つる同じ緑の流と共に、渾べて右へ右へと大壑の中に漲り落つれば、壑の底には幾個の小山跳ねかへりて緑の餘波を掀げぬ。

時は午後の二時頃にや、空氣重く蒸しあつくして、西の空は銅色に見え、滿目の山沈沈として聲なく、人を嚇する靜寂山谷に滿ちたりき。

暫く坐する程に、烏帽子が嶽の空鬱然として洋墨を潑せる雲むらむらと立ち渡りつ。何處ともなく襲ひかかる風雨の攻鼓とも云はん、雷の殷殷と鳴り出て、空氣は俄かに打ちしめりて、滿目の景憂ふる様に暗むよと思へば、一陣の冷風颯と面を掃ひ、湖水の音か、雨の音か、はた萬山の樹木枝を震ふ音か、蕭然たる音山谷に起り、天地に瀰り、風雨と戦ふ山嶽

の矢叫とも聞こえて、凄まじきこと言ふべくもあらず。

眼を上ぐれば、烏帽子が嶽以西の山山は濛濛たる印度藍色の雲に蔽はれて、風丸雨彈の戦まさに酣なれど、國境の連山は雪色猶鮮かに、天に倚り地を踏まへて金輪際動かじと、一陣、二陣、中軍、後隊、備を固めて二十里が程に立ち列び、慘として風雨の來襲を待つ状、ワールロ一の英軍もかくやと思はれて、沈鬱、悲壯、跌宕なる自然の威力の森然として身に浸むを覺ゆ。大壑に臨みてさし出でたる櫓の古木に梟あり、頻りに咽を鳴らす。

已にして雷鳴大いに起り、雲は吾が頭上まで眞闇に掩ひ



金輪際 大地底林動せり
頂上を動かすも

灌佛の頃、旧曆四月十五日、
例す。祭の頃、祭の神は天皇
月の中、即日は今月十五日に
朝延を祀る。手紙朝延は
甚だ盛光なり。今月十五日に
筆す。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこ
そ、世のあはれも、人の戀ひしさもまされと、人の仰せ
られしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲ふくころ、
早苗とる頃、水鶏の叩くなど、心細からぬかは。六月
の頃、あやしき家に、夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶ
るもあはれなり。六月祓又をかし。

柵機まつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒に
なるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稻
田かりほすなど、とりあつめたる事は、秋のみぞ多か
る。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつづく

柵機、昔七言、
女は天帝の女、
いと稱し、
をまめかし、
優美風流

れば、みな源氏物語、枕の草子などに、ことふりにたれ
ど、同じ事又今更にいはじにもあらず。おぼしき
事は、ぬは、腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、
あぢきなきすさびにて、かいやりすつべき物なれば、
人の見るべきにもあらず。

さて、冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。
汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白うおける
あした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮
れはてて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ又なくあはれ
なる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒

御佛名、三月十八日、三月廿五日、
三日、前卷多、僧侶ヲ空申シ
君ト三世諸佛、御名ヲ行
ヒトニ、儀式ナリ。

荷前の使、荷前、荷前初
徳ガ、清和天皇御十陵
親ガ、御生父母表ト御陵但
天智帝、御夫人ト身ト、御墓
（御夫人ト身ト）ニ、荷前ヲ
供ヘ、ニ、御トシヨリ、年々、昔
ヲ使フ、ウチラレトナリ、
但ト後、三、七、陵、墓トナリ、
あはれ、やんごとなき、
あはれ、深ク心ニ感ズル也、
やんごとなき、ニ、御トナリ也
高貴トナリ、何ト如何トナリ
ニ、御トナリ得、トシ、意ナリ
黄トナリト、又、貴人ト、意ナリ、
追儼、三月、大晦日、おはらひ
式ナリ、三日、面ヲ、御トナリ
有、ス、子、相氏ト、要、唐トシ
柳トナリト、年々、矢ヲ、有、ス、人ト、
ニ、追、ヒ、マ、リ、テ、要、唐、押、ト、ス、
儀式ナリ。

けくすめる甘日あまりの空こそ心細きものなれ。
御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやむごとなき。
公事どもしげく、春のいそぎに取り重ねてもよほし
行はるる様ぞいみじきや。追儼より四方拜に續く
こそおもしろけれ。つごもりの夜いたる暗きに松
どもともして、夜半すぐるまで、人の門叩き走りあり
きて、何事にかあらん事事しくのしりて、足を空に
まどふが、曉がたよりさすがに音なくなりぬること
年のなごりも心ぼそけれ。亡き人の來る夜とて魂
祭るわざは、此の頃、都にはなきを、あづまの方には猶

四方拜、元且、寅ノ刻ニ、天子、情
女殿ニ、出、御、ト、モ、シ、天、地、四、方、属
星、山、陵、ト、シ、拜、ス、儀、也、
公、年、朝、延、創、年、新、儀、也、
二、年、新、儀、公、年、一、レ、シ、ヨ、リ、物、ト、
儀、式、ナリ。

する事にてありしこそあはれなりしか。
かくて、明け行く空のけしき昨日にかはりたりとは
見えねど、引きかへ珍らしきここちぞする。大路の
さま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ又
あはれなれ。徒然草

六 荒れたる御堂 兼 好法師

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事去
り、樂しび悲しび行きかひて、花やかなりしあたりも
人住まぬ野らとなり、かはらぬすみかは人あらたま

飛鳥川、大和國高市郡
淵瀬、一ノ瀬、名、淵、ト、シ、樹、根
寄、ト、ナリ、
古、今、集、ト、
世、中、何、ト、ナリ、
昨、日、御、ト、
久、あ、は、れ、ナリ、

如摩 名向ア摩ナクモ

以テ朗詠ニ供トスルモノナリ

藤原公任ノ句ニ

桃李不言春發着

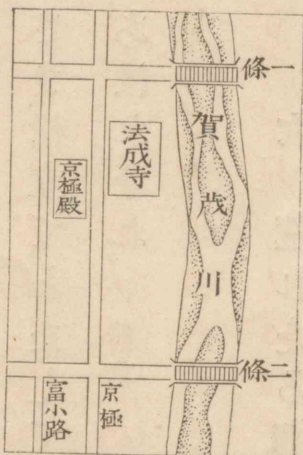
烟霞無跡昔誰栖

京極殿 藤原道長ノ邸也

信成寺 道長建立

りぬ。桃李ものいはねば、誰れと共に昔を語らん。
まして、見ぬいにしへのやむごとなかりけん跡のみ
ぞいとほかなき。

釈かたし、



京極殿、法成寺など見るこそ志
留まり事變じにけるさまはあ
はれなれ。御堂殿の造りみが
かせ給ひて、莊園多く寄せられ
「我が御ぞうのみ、帝の御後見、世のかためにて行末ま
で」とおぼし置きし時、いかならん世にも、かばかりあ
せはてんとはおぼしてんや。

老の如くめらるるまゝ(老ノ柱也)
あはれんとおぼす(水ノ千代)
色サをコト、ヨリ轉トテ象
フルヤト

大門(莊門)

丈六ノ佛九體(一丈六尺ノ佛)

九體ヲ安置スルハ九體ノ障土

ヲ敷ヒナリ、無量壽寺ノ敷

ニ九體ノ障土トシ、上ニ佛ノ

中ニ佛ノ下ニ佛ノ

行第大納言、小野道成

藤原佐理ト共ニ佛朝

ノ在書家、三蹟ト云ル、

大門、金堂など近くまでありしかど、正和の頃、南門は
焼けぬ。金堂は其の後、倒れふしたるままにて取り
立つるわざもなし。無量壽院ばかりぞ其のかたと
て残りたる。丈六の佛九體いと尊くて並びおはし
ます。行成大納言の額、兼行がかける扉、あざやかに
見ゆるぞあはれなる。法華堂などもいまだあるめ
り。これも又いつまでかあらん。かばかりの名残
だになき處には、おのづから礎ばかりのこりたるも
あれど、さだかに知れる人もなし。されば、よろづに
見ざらん世までを思ひおきてんこそはかなかるべ

る事かぎりなし。
 しばしかなでて後、抜かんとするに、大かた抜かれず。酒宴
 ことさめて、いかかはせんと、惑ひけり。とかくすれば、首の
 まはりかけて、血垂り、ただはれにはれみちて、息もつまりけ
 れば、打ちわらんとすれど、たやすくわれず、響きて堪へがた
 かりければ、叶はで、すべきやうなくて、三足なる角の上に、か
 たびらを打ちかけて、手をひき、杖をつかせて、京なるくすし
 のがりゐて行きけり。道すがら、人の怪しみ見る事限りな
 し。醫師のもとにさし入りて、むかひ居たりけん有様、さこ
 そはことやうなりけめ。物をいふも、くぐもり聲に響きて
 聞こえず。「かかることは、書にも見えず、傳へたる教もなし」
 といへば、又仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕
 がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。

かかるほどに、ある者のいふやうたとひ、耳鼻こそきれうす
 とも、命ばかりはなにか生きざらん。ただ、力をたててひき
 給へとて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首
 もちぎるばかりひきたるに、耳鼻かけうげながら、抜けにけ
 り。からき命まうけて、久しくやみ居たりけり。徒然草

八 高名の木のぼり

兼好法師

高名の木のぼりといひしをのこ、人を掟てて高き木
 へのぼせて梢を切らせしに、いと危く見えし程はい
 ふこともなくて、下るる時に、軒だけばかりになりて
 「あやまちすな。心して下りよ」と詞をかけしを、かば

かりになりては、跳びおるともおりなん。いかに
くいふぞ」と申ししかば、その事に候ふ。目くるめき
枝危きほどは、おのれが恐侍れば申さず。あやまち
は安きところになりて必ずつかまつる事に候ふ」と
いふ。

あやしき下藁なれども、聖人の誠にかなへり。徒然草

九 青眼白眼

兼好法師

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬことな
り。用ありて行きたりとも、其の事はてなば、とくか

へるべし。久しく居たるいとむづかし。人とむか
ひたれば、ことは多く、身もくたびれ、心も静かならず、
萬の事さはりて時をうつす。互のため益なし。い
とはしげにいはんもわろし。心づきなきことあら
んをりは、なかなかそのよしをいひてん。
同じ心にむかはまほしく思はん人の、徒然にて、今し
ばし、けふは心静かになどいはんはこの限にはあら
ざるべし。阮籍が青き眼、誰れもあるべきことなり。
そのこととなきに、人の來たりて長閑かに物語して
歸りぬる、いとよし。また文も久しくきこえさせぬ

阮籍、晋代竹林七賢一人
高談放論、大酒飲、以テ
得、豪トス故、礼教ニ對シテハ
白眼ヲ以テ迎ヘ、淫逸肉林ニ
去リ、眼ヲ以テ歡迎セリ、蓋シ
漆時ニテ、以テ人ヲ物ヲ理ヲ思
トシテ、賢トナス、晋ノ滅亡ニ由ルト云フ。

國文教科書卷五

七十五

檀那持読 陀那鉢底 裏
 態 諸ラ清証とん施主
 ンヨ施 意ナチチ主人義
 上ル
 外國 謙ノ和南 證中 こんモ
 極多 多シ 即寺 弊ハ 弊也
 早歌 當時 流行 歌

心りかるべし」とおもひけり。次に「佛事の後、酒など
 すすむる事あらんに、法師のむげに能なきは檀那す
 さまじくおもふべし」とて、早歌といふ事を習ひけり。
 二つの業やうやう境に入りければ、いよいよよくし
 たく覺えて嗜みける程に、説經ならふべきひまなく
 て、年まりにけり。

此の法師のみにもあらず、世間の人なべて此の事あ
 り。若き程は諸事につけて、身を立て、大いなる道を
 も成し、能をもつぎ、學問をもせんと行末久しくあら
 ます事ども心にはかけながら、世をのどかに思ひて

漢書ニ如政上走ルト云

あまほし
 アラフクホシクノ畏、マラハ
 んことニミテ、アコトホシク也

打ち怠りつつ、まづさしあたりたる目の前の事のみ
 にまぎれて月日を送れば、事事なす事なくして身は
 老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひしやうに
 身をももたず。とりかへさるる齡ならねば、走りて
 阪をくだる輪の如くにおとろへ行く。

されば、一生のうち、むねとあらまほしからん事
 中に、いづれかまさるとよくおもひくらべて、第一の
 ことを案じ定めて、其の外は思ひすてて一事をはげ
 むべし。一日の中、一時の中にもあまたのことのき
 たらんなかに、少しも益のまさらん事をいとなみて、

其の外をばうち捨てて大事をいそぐべきなり。何方をもすてじと心にとりもちては、一事も成るべからず。

たとへば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて小を捨て大に就くがごとし。それにとりて、三つの石を捨てて十の石に就く事は易し、十をすてて十一につく事は難し。一つなりとも優らん方へこそつくべきを、十までなりぬれば、をしくおぼえて、おほく優らぬ石にはかへにくし。是れをも捨てず、彼れをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これを

も失ふべき道なり。

京にすむ人、いそぎで、東山に用ありて既に行きつきたりとも、西山に行きて其の益まさるべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。「ここまで來著きぬれば、此の事をばまづいひてん。日をささぬ事なれば、西山の事は歸りて又こそ思ひ立ため」とおもふ故に、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる、これをおそるべし。

一事を必ず成さんと思はば、他の事の敗るをもいたむべからず、人のあざけりをも耻づべからず。萬

事にかへずしては、一の大事成るべからず。

「人のあまたありける中にて、あるもの『ますほのすすき、ますほのすすき』などいふ事あり。わたのべの聖このことを傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師其の座にありけるが、聞いて、雨のふりけるに『簑笠やある。貸し給へ。彼の薄の事習ひにわたのべのひじりのがり尋ねまからん』といひけるを、あまりに物さわがし。雨やみてこそ」と人のいひければ、むげの事をも仰せらるるものかな。人の命は雨のはれまをまつものかは。我れも死に、聖も失せなば、尋ね聞き

ますほ(ますほ) 嘉禎禪
わたのべ 撰撰河内盛郡
登蓮法師
平安朝 末瀬人
千代集来々 詞苑集来々
千代集来々ニニニ 詞苑集来々
アリテ存スルナリ

あかに 只能ニ

やしく 春あまらまにト

陽情篇ニ 故則有切ナリ

せうと 文
けいめい 経院

てんや」とて走り出で行きつつ習ひにけり」と申し傳へたるこそゆゆしくありがたう覺ゆれ。

「敏きときは即ち功あり」とぞ論語といふ書にもあるなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をもおもふべかりける。徒然草

○ 松下禪尼

兼好法師

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるる事ありけるに、煤けたるあかりさうじの破ればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつはられければ、せうとの城介義景、其の日のけいめいして候ひけるが、賜はりて、

なにがし男に張らせ候はん。さやうのことに心得たる者に候ふと申されければ、其の男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、猶一間づつはられけるを、義景、皆を張りかへ候はんは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも見ぐるしくや」と重ねて申されければ、尼も、後はさはさはと張りかへんと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。『物は破れたる處ばかりを修理して用ふる事ぞ』と若き人に見ならはせて心づけんためなり」と申されける、いとありがたかりけり。

世を治むる道、儉約をもととす。女性なれども、聖人の心にかよへり。天下をたもつ程の人を子にてもたれける、誠にただ人にはあらざりけりとぞ。徒然草

十二 文體論

矢野文雄

左傳の前に左傳の文なし。左傳出でて後、始めて左傳の文あり。源氏の前に源氏の文なし。源氏出て後、始めて源氏の文あり。史記は史記を以つて一體を始め、太平記は太平記を以つて一體を成す。これを要するに、その體の新と古とを問はず、時に嘉みせられ、俗に尙ばるる文辭の後世に傳はる者、遂に一體の祖をなすのみ。もし、時俗に入り易き文を作らず、勉めて舊様を墨守し、前人の陳述を踏襲するを以つて妙となさば、左傳の外に史記あるを得ず、源氏の

左傳、春秋左氏傳、トナリ
左傳、于卷二、から、左傳、一、
魯史、孔子、大義、ヲ明、カ、
シ、
左、明、氏、傳、ヲ、
公羊、傳、ト、
源氏物語
紫式部、著、源氏傳、
記、
史記、
漢、書、
本、
花、
上、
歴、

新以來は、有識者が舊物を打壞するにその全力を用ひたる時世なれば、漢學者も漢文を以つて時文を規する力なく、和學者も和文を以つて時文を抑ふる能はず。況や舊來の俗文を以つてこれを矯制せんと欲する者をや。わが邦の文體雜駁にして一定の格例なきこと、實にこの時より甚だしきはあらざるなり。

余かつて維新以來の文體を觀察し、いささか心に會する所あり。みづから謂ふ、維新以降、わが邦の文體が放縱不法にして格例なく、渾沌草創の有様に陥り

渾沌草創 日本誌ニハ
天地渾沌如鶏子トアリ、
未だ混沌又何稱意也

方、正誤(予ニシテ下ル也)
適多紙(多々)
當應(道理上ヲ推論トモ思ハレ
未だ混沌又何稱意也)
將且(時未タ至リト有様ト意也)

たるは、これ即ち次第に煩雜に赴き、次第に精密に赴くわが社會に適合すべき一種の新體を生出し來たるべき時運なり。然るに、時文を難んずるに漢文、和文の正格を以つてするは、眼光の小なる者のみ、余輩應にかくの如くなるべからずと。これより以後、また漢文を以つて時文を褒貶するを止め、勉めて完全なる時文を作らんと欲する志を生じたり。

方今、わが邦の文體に四種あり、曰はく、漢文體なり、曰はく、和文體なり、曰はく、歐文直譯體なり、曰はく、俗語俚言體なり。而して、この四種のもののおの長の短

滑稽ニ義アリ
ハ恒也 世にコトイフ
ハカガリ 詠調曲アリス
笑キヲシラト

なき能はず。概してこれを論ずれば、悲壯典雅の場
合に宜しき者は漢文體なり、優柔溫和の場合に宜し
き者は和文體なり、緻密正確の場合に宜しき者は歐
文直譯體なり、滑稽曲折の場合に宜しき者は俗語俚
言體なり。以上四種の文體は皆おのおの適合すべ
き地ある者にて、一體獨りその美を専らにすること
能はず。それ、一體獨りその美を専らにすること能はずして、
諸體おのおのその長ありとせば、放縱不法の文體廣
く世間に行はれて、非難を受けざる今日は、これ即ち

文學の士が大いにその力を文苑に振ふべき好時機
なり。何となれば、漢文、和文、歐文直譯、俗語俚言の四
體を雜用して、自由にその意を達するを得ればなり。
もし一篇の文中に、典雅悲壯を要する場合あらんか、
われ漢文體を以ってこれを叙するを得ん、優柔溫和
を要する場合あらんか、われ和文體を以ってこれを
述ぶるを得ん、緻密精確の場合には、歐文直譯體のあ
るあり、滑稽曲折の場合には、俗語俚言體のあるあり、
四體の精華を摘選して、各これを妥當なる地に應用
せば、天下の事物またまさに寫し出だし難きものあ

妥當也

らざらんとす。

然らば、今日はこれ文を屬する人をして大いにその便利を増加せしめたるのみならず、精に入り、粗に入り、微を究め、妙を盡くす一大文字と一新文體とを生み出せしむべき時運なりといふべし。専ら一種の文體を修むる者よりこれをいはば、雜駁放逸の看あるべしといへども、天下達眼の士よりこれを見れば、却つて文苑の精華を増益する觀あらん。もし四體を雜用して新樣の一體を生出し、大いに時俗に嘉尙せらるるを得ば、その後世に傳へて一體の祖となるを得

べき時機、今日に於いてか有り。世間文學の士、豈ただ、前人を踏襲して舊様に拘拘たるべき時ならんや。意に隨つて漢文、和文、俗語の三體を雜用する者は、すでに非常の便宜あるに、今又歐文直譯なる一種の新體を生ずるに至る。ここに於いてか、文を屬する便ますます加はつて、文體又ますます變ず。もし一體を墨守する者よりこれを見れば、その奇怪幻妖なる、實に愕くべき者多からん。然れども、一種の器械を專用するは四種の器械を兼用するの利に若かざるは、世上普通の道理なれば、行文の間、粗に入り、精に入り、

微を究め、妙を盡くすの便は、四體兼用の時文に超ゆべき者なきや明白なり。刀鋸斧鑿を兼用せず、ただ一器械を以って巧に什具を製する者あらば、人皆その妙技を賞せん、然れども、これただその能くし難きを能くする藝能を賞するに過ぎざるのみ。もし眞に精巧の什具を得んことを欲せば、世人の選は必ず刀鋸斧鑿の諸器械を兼用する者に落ちん。然らば、その論意を十分に達し得るは勿論、苟も言氣文勢を飾るに必要と認むる場合あらば、四體兼用して一新體を作らんこそ善く文を屬する者といふべけれ。

什具、什ハ十也、教多キ也、
ハ同用具ヲ然云々ニ至ル

ただ、新體の時文を屬するに於いて、最も注意すべきは、每體格に入る文字を移用するに在り。漢文體を用ひて漢文の格に入らず、和文體を用ひて和文の格に入らざるが如きは、これすなはち時文の通弊なり。もし能く四體を雜用して、各自その格例に悖らず、接續の間亦甚だ穩當圓滑なるを得ば、時文の妙、すなはちここに盡きん。

又歐文直譯體は、その語氣、時として硬澀なるがために、あるひは文勢を損ずることなきにあらず。然れども、極精極微の情況を寫し、至大至細の形容を示す

に於いては、他の三體に有せざる一種の妙味を含蓄せり。故に、この一體を時文に雜用するは至大の便利を得る者なり。他の文體を專修する學士よりこれを見れば、不法放逸の文字たる謗を免れざる者あるべしといへども、しばらく忍びてこれを咀嚼するときは、その間に於いて、必ず一種の趣味あるを發見し得べし。又、社會年を累ぬるに従ひ、人事ますます繁密に赴くが故に、往代舊時の文體を以つて、現世の新事物を叙記せんことは、甚だ覺束なき者なり。故に、歐米の進歩せる繁密の世事を叙記して、毫も遺脱な

からしむる歐米の語法、文體を移し來たつて、これをわが時文に用ふるときは、便宜を感ずること尠からず。余は深く信ず、後來、歐文直譯の文體がわが時文に浸入し來たること益盛んなるべきを。およそ、文辭の後世に傳はる者は皆概ね託する所を得るに在り。あるひはその記する所、百年治亂の迹に係かり、天下後世これに據らざれば當時の事態を詳かにする能はず、ためにその長く世に行はるる者あり。又あるひは、その論ずる所、一世の大勳偉業に係かり、天下後世これに據らざれば當時の顛末を明

通鑑、資治通鑑ノト
同馬光宗、履安、敏、愷、
著セシモノ。

詩云、義、風賦、比、興、雅、
頌也、然、先、人、德、ヲ、稱、
ノ、辭、也、

稗史、稗、史、細、末、史、史、家、

昔、文、野、一、主、閑、若、風、俗、

ノ、宛、ト、シ、稗、史、ヲ、シ、閑、

談、若、説、ヲ、書、シ、ム、是、稗、

史、ニ、シ、テ、方、決、ク、而、云、

フ、ニ、至、リ、

協、衆、心、カ、ヲ、合、ス、ト

協、同心、ス、ト

踴、同志、ス、ト

かにする能はず、故にその文久しく後に傳はる者あり。左傳、史記、通鑑、太平記、源平盛衰記の類、即ちこれなり。又ただ世人に娛樂を與ふるがため後世百歲に傳はる者あり、詩賦、歌頌、稗史、小説の類これなり。甲は、實事を證する用をなすがために後世に傳はる者なれば、その文あるひは時俗に嘉尚せられざるも可なれど、乙は人に娛樂を與ふるがために世に行はるる者なれば、その文廣く時俗に悦ばるるにあらざれば、決して力を世間に得ること能はず。これ、稗史、小説に於いて、時俗に入り易き文體を用ふるの、尙更

に止むべからざる所以なり。經國美談

十三 思ふどち

攝政太政大臣家百首歌合に、野遊の心を

藤原家隆朝臣

思ふどちそことも知らず行きくれぬ、

花のやどかせ、野べのうぐひす。

山里にまかりてよみ侍りける能 因法師

山里の春の夕暮きて見れば、

いりあひのかねに花ぞちりける。

思ふどち、若の山辺にあくか、れ、て、ま、ど、ち、も、一、ら、ぬ、た、い、水、こ、か、ト、イ、リ、フ、シ、テ、ウ、カ、也、

攝政太政大臣藤原家隆朝臣

歌合、平定朝、宇多朝、宇治朝

遊戯、才歌人、二相、三、人

判者、三、人、歌、雅、雄、判、判

二勝、三、勝、也、

家隆、御、辨、初、世、歌、人、也

一八七七年、二九一、八、九、六、年、也、

後、成、身、子、ト、ナ、リ、大、三、三、三、

後、馬、河、原、ト、シ、テ、七、三、三、三、

後、成、身、子、ト、ナ、リ、大、三、三、三、

後、成、身、子、ト、ナ、リ、大、三、三、三、

後、成、身、子、ト、ナ、リ、大、三、三、三、

後、成、身、子、ト、ナ、リ、大、三、三、三、

後、成、身、子、ト、ナ、リ、大、三、三、三、

後、成、身、子、ト、ナ、リ、大、三、三、三、

後、成、身、子、ト、ナ、リ、大、三、三、三、

鹿山卿、在京大夫師光女
釘を歌うまの後鳥羽帝
愛をうまの甘有る三三後入。

五十首歌奉りし中に、湖上花を

宮内卿

花さそふひらの山風吹きにけり、

こぎ行く船のあと見ゆるまで。

題知らず

藤原家隆朝臣

いかにせん、來ぬ夜あまたの杜鵑

待たじとおもへば、村雨の空。

夏月をよめる

源頼政

庭のおもはまだかわかぬに、夕立の

そらさりげなくすめる月かな。

杜鵑鳴く常、月を擇ん
村雨の空、古来いへり
由ん。

さうけなく、然りて気す也

家定朝臣信吉、昔は
覺て一時山に入り、
そそ七つ山、
百憂を老かす鳴かす見す、
下句す。

昔中よみちこま
ふまればおもむいる
やは乃たより下堂
志のそほくふれ

藤原家定書
(名家真筆帖)

心なき身、出家、身は古、宿
美理の解せぬ、宿係せ、心は雨
り、感情の刺戟、心は雨、宿
は、心は雨、宿係せ、心は雨、
宿係せ、心は雨、宿係せ、心は雨、
宿係せ、心は雨、宿係せ、心は雨、

題知らず

西行法師

心なき身にもあはれは知られけり

鳴立つ澤の秋のゆふぐれ。

西行法師すすめて百首歌よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

見渡せば、花も紅葉もなかりけり、

うらのとまやの秋の夕暮。

みちのくににまかりける時、讀み侍りける

能因法師

夕されば、しほ風こして、陸奥の

吹き来りて

花も紅葉もなかりけり、
うらのとまやの秋の夕暮。
みちのくににまかりける時、
讀み侍りける

野田の玉川、陸中九戸歌
系村一境

野田の玉川、千鳥なくなり。

百首歌奉りしとき、藤原定家朝臣

駒とめて袖うちかはらふ不か落けもなし、

さののわたりの雪の夕暮。

守覺親王家に、五十首歌よませ侍りけるに、旅

の歌、皇太后宮太夫俊成

立ちかへり、またも来て見ん、松島や

をしまのとまや波にあらすな。

鴨の社の歌合とて、人人よみ侍りけるに、月を

鴨 長 明

さののわたり、
純伊国平豊歌、輪崎有
一落
万葉集
くさくさもやうくも雨か
三輪の舞、さのわたりは
なまもあらなくは、句改作

石川、せみの小川、共
鴨川、其友

石川や、せみの小川の清ければ、

月も流を尋ねてぞすむ。新古今和歌集

十四 頼山陽

朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼れに在りては、文學再興して、古文辭其の盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚たるを免れず。われに在りては、戰國の餘習已に脱して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學、詞藝、其の秀を鍾め其の萃を拔きたれども、わが近世文學は

纔かに萌芽を發したるのみ。もし是の時に方り、世の偉才を生じて、以って我が文學を振ふものあらんか、其の風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は獎勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられ、或は反激せられ、才俊の士は彬彬として輩出し、以って文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黄金時代は、必ず三四十年前に來たりしならん。つらつら各國文運の振興を考ふるに、其の先を作すものは、大抵詩人ならざるはなく、其の衰を振ふもの、亦詩人ならざるはなし。チヨ一サー、スペンサー、ミ

ルトン、シエクスピアの英文學に於ける、コルネーユ、モリエール、ラシーヌの佛文學に於ける、ゲーテ、シルレル、レッシングの獨逸文學に於ける、ダンテ、ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ち我が文學を振へる張本も、亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於いて眞淵、景樹二翁を得、近體詩家に於いて近松、竹田二叟を得たれども、出づるに或は其の時を得ず、才或は其の器に盈たず、學或は其の道に適せず、力或は其の量に合はず。是れを以つて其の勢力の及ぶ所、限極せられて、いまだ文學の

英文學者
千七百一十二年一四〇年致
スニヤ
一六七〇年致
一六八〇年致
一六九〇年致
一七〇〇年致
一七一〇年致
一七二〇年致
一七三〇年致
一七四〇年致
一七五〇年致
一七六〇年致
一七七〇年致
一七八〇年致
一七九〇年致
一八〇〇年致
一八一〇年致
一八二〇年致
一八三〇年致
一八四〇年致
一八五〇年致
一八六〇年致
一八七〇年致
一八八〇年致
一八九〇年致
一九〇〇年致

権臣の地位
恰當 適當

全般に向かつて、其の積衰を振ふこと能はざりき。」余は彼の諸家の外に、才學、力量、渾べて其の權度を得て恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いて其の用處を誤り、日本文學の泰斗たる名譽を得そくなひ、徒らに史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶世、絶代の文字を以つてせらるるに至らず、萬能達して、一心足らずといふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾て其の人と其の才とを痛惜せずんばあらず。余は今日、世人が猶其の人を崇拜するを見て聊か自

なる時は、微として穿たざるなく、細として及ばざる
 なし、疎にして短なる時は、或は脈脈の餘情を含み、或
 は嫋嫋の餘韻を存す。争戦を叙すれば、讀者をして
 汗を握らしめ、別離を叙すれば、讀者をして涙に咽ば
 しむ。而して其の叙論の如き、俯仰低徊、感慨淋漓、誠
 に讀者をして一唱三歎せしむるものあり。これら
 の文字、これらの思想、果たして如何なる天才より流
 出したるものぞ。其の題目を擇ぶに源平以後の争
 戦記を採りたるが如き、其の事實に於いては、博引旁
 搜と明證確説とを主として、猶讀者を了悟せしむる

嫋々細々三絶

俯仰低徊、感慨淋漓、誠
 珠瀉

博引旁搜

正記

矛盾、轉折子、矛盾、
 矛盾、轉折子、矛盾、
 矛盾、轉折子、矛盾、

矛盾、轉折子、矛盾、

を務めず、専ら其の文筆の靈動して、讀者をして感激
 せしめんとしたるが如き、特に王室と忠臣とを思ふ
 情切なるより、正記を立つる標準定一ならずして、其
 の體裁に前後の矛盾を來たせるを顧みざりしが如
 き、半生の精力を費やして編述したる二十二卷の外
 史は、看來たれば一篇無韻の叙事詩たるのみ。
 試に其の論策、文章を視よ。民政といひ、市糴といひ、
 水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして實用に施す
 べからざるもの比比として皆これなれども、其の熱
 情の溢れたる、其の文勢の壯なる、頗る少年の大聲

んか、儼然たる叙事詩を作りて我が文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に倣して固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて専ら功力を詩に用ひざりしこと。余が山陽の専ら詩人とならざりしを惜しむ理由、頗る多し。今且これを擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、其の天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに、みづから新機軸を求むべし。而して史傳を以つて料とすること、其の卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而

して尊王の誠と、忠臣義士を思ふ情とは、面に盜れて背に洩し。これ三なり。

而して余が特に表彰せざるべからざる第四の理由あり。余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常曰、謂我才子、未悉我者也。謂我能刻苦者、真知我矣」といふに至り、私かに其の實を失へるにあらざるかを訝りしが、後、彼の前兵兒謠、并に蒙古來の原稿を觀るに及び、其の苦心經營、一句も苟もせざりし實迹を審かにし、且其の古賀穀堂を訪ひ、始め其の「千言立成」の敏才に驚きしも、數月を隔てて再び訪ひ

深不歎、中其國人山陽先生也、
大志を以て陳時、其志を以て也

肥後の山陽、其志を以て陳時、
其志を以て也、其志を以て也

前兵兒謠

不至所袖至腕、腰間秋秋鉄、
人觸新人馬、能駟馬、人駟文、
健兒社、其能未、何以酬、理凡、
碑、是、是、是、是、是、是、
展、以、以、以、以、以、以、
後兵兒謠

董、如、如、如、如、如、如、
南、南、南、南、南、南、
退、退、退、退、退、退、
杜、杜、杜、杜、杜、杜、

其意、其意、其意、其意、其意、其意、

雲耶山耶吳耶越水天髣髴青一髮萬里泊舟天草洋煙橫
眠驚舡底響空潮天字洋中紅髣髴

篷窓日漸沒瞥見大魚波間跳太白當船明似月

太白一星光似月波百照兄毛魚跳

決スル 昔 西 南 不 見

危礁亂王大濤百官道沿緣海又山

弱弱低坐帆影滅天連水處是臺灣

稿定未陽山頼
(詩遊西蹟眞生先陽山)

たる時其の文稿の依然として改刪する所なかりしを觀て茲に與みし易きナシシのみの念を起こしたりといふ逸事を聞き其の意匠慘憺ハツタム勉勵刻畫の勞を厭はざる忍耐あるを明認し坐ろに景慕の情を催したり。

・創意 意 意匠 匠 文也
・意匠 意匠 匠 文也
・絢爛 絢爛 文也 作也
・末 末 文也

・輕愛 暇を働かぬ

・訓詁 註釋 同

・常套 一般 風 套 同

蓋し創意の才は必ず刻畫の力と相待ちて、後始めて絢爛の華彩を發すべし。彼の「好句天成」といふもの、豈必ずしも吐屬輒成章の謂ならんや。余が山陽を惜しむ第四の理由とするは、即ち斯の經營刻畫の魂氣のみ。又山陽が當時の儒者の如くに、經義に耽り、章句訓詁の末を爭ふ風なかりしは頗る其の才の發達に便なりしなるべしといへども、彼の經濟實用を以つて學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては山陽亦其の常套を襲ふを免れず。

郡教時代、由りて異に
延喜式、五百九十九
和名抄、五百九十九
拾芥抄、六百四十一
和名抄、村上天宮、御宇、源順
氏、著せしむ。

あらし、能く思ひ習はせる故にこそあらめ。
なほ、行く末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。
大方、おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨をのこす
べき事をば、なか顧みざらん。君は萬姓の主にて
ましませば、限ある地をもちて限なき人にわかたせ
給はん事は、推しても測り奉るべし。一國づつを望
まば六十六人にてふさがりなん、一郡づつといふと
も日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は喜
ぶとも千萬の人は喜ばじ。況や日本の半ばを志し、
みながら望まば、帝王は何處をしらせ給ふべきにか。

禮記、
五百、十人曰選、
百、十人曰英、
倍、萬人曰傑、
萬人曰聖、
トアリ

かかる心の萌して言葉にも出だし、面にも恥づる色
のなきを、謀叛のはじめとはいふべきなり。將門は
比叡山に登りて大内を遠見して謀叛を思ひ企てけ
るも、かかる類にやありけん。昔は人の正しくて、將
門に見も懲り、聞きも懲りけんを、今は人人の心かく
のみなりにたれば、此の世いよいよ衰へぬるにや。
漢の高祖の天下を取りしは蕭何、張良、韓信が力なり。
これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふと
ぞ。中にも、張良は高祖の師として、籌を帷幄の中に
運らして、勝つことを千里の外に決するは、此の人な

り」と宣ひしかど、張良はおごることなくして、留といひてすこしきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣、多くほろびしかど、張良は身を全くしたりき。

近き世の事ぞかし、頼朝の時までも、文治のころにや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向かふことありしに、平重忠が先陣にて、其の功のすぐれたりければ、五十四郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたる少しき所を望みて、賜はりけりとぞ。是れは、人にひろく賞をも行はしめんがためにや。

文治三年頼朝泰衡ヲ討ツ

賢かりけるをのこにこそ。

又、直實と云ひけるものに、一所を與へ給ふ下文に「日本第一の甲の者なり」と書いて賜ひてけり。一とせ、彼の下文をもちて、奏聞する人のありけるに「褒美の詞のはなはだしきに、與へたる處の少さ、まことに、名を重くして利を軽くしける、いみじきこと」と、口口にほめあへりけり。いかに心得てほめけん、いとをかし。

是れまでの心こそなからめ、事にふれて、君をおとし奉り、身をたかくする輩のみ、多くなれり。ありし世

いかに賢くか
この甲の者なりと書す

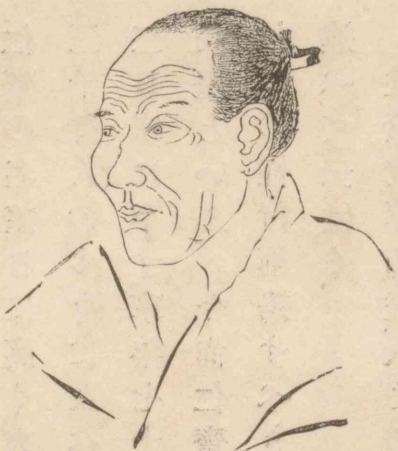
の東國の風儀もかはりはてぬ、公家のふるきすがたもなし。いかに成りぬる世にかと、嘆く輩もありと
きこえしかど、中一とせばかりは、誠に一統のしるし
覺えて、天の下こぞり集まりて、都の中はえはえしく
こそありけれ。神皇正統記

○ 伊藤仁齋

井上哲次郎

仁齋、姓は伊藤氏、氏は維楨、字は源佐、京都の人なり。寛永四年七月二十日、東堀川の宅に生まる。幼きより深沈にして競はず、尋常の兒子と異なる所あり。十一歳にして、初めて師に就いて大學を讀み、治國平天下の章に至りて曰はく、今

隔噎
イカン



伊藤仁齋
(伯爵松平直亮藏)

の世亦かくのごとき事を知るものあらんや」と。
延寶元年五月、京師大火あり、仁齋亦その災に遭ひ、百物蕩燼す。彼れ他物を顧みず、唯論孟古義一部を携へて、逃れて京極の方恩寺に僑居す。これよりさき、母、隔噎を憂ふ、仁齋、奉養
に至らざる所なし。延いて三年
に至る。時に、肥後侯、祿千石を以つて之れを招く、然れども、侍
養、人なきを以つて之れを辭す。
この歳、母、遂に僑居に瞑す。瞑
するに臨んで、合掌して禮をなして、彼れに其の孝養の厚きを謝せりといふ。仁齋の人となり、推して知るべきなり。
明年九月、父長勝亦卒す。仁齋乃ち喪に服すること、前後通

ふちごも、藤は絨、表服

じて凡そ四年なりといふ。除服の日詠める歌に、
 三年とて定めしほどのかぎりあれば、
 けふぬぎすつるふぢごろもかな。
 仁齋の名望日に高く、來たりて學ぶもの愈多く、その數凡そ
 三千餘人の多きに及べり。仁齋、寶永二年、痢を病み、三月十
 二日、家に卒す、享年七十有九。五男あり、長胤、長英、長衡、長準、
 長堅といふ。今尙仁齋の子孫あり、堀川に住す。
 仁齋の性行、稱揚すべきもの少しとせず。東涯その性行を
 述べて云はく、

性資寛厚和緩、人その疾言遽色を見ず。城府を設けず、邊
 幅を修めず、未だ嘗て古怪迂僻矯激の行をなして駭異を
 取らず。人少長となく、之れに接するに誠を以つてして
 厭怠の色なし。その大義の關する所に及んでは、之れを

藤は絨

誘ふに萬鍾を以つてすと雖も奪ふべからざるなり。
 蓋し是れ事實にして、決して父の徳を誇張するものにあら
 ず。先哲叢談卷四に云はく、

大高阪清介適從錄を著し、以つて仁齋を駁す。弟子持ち
 來たりて之れを眎して曰はく、「先生之れが辨を作られよ」と。
 仁齋笑つて言はず。弟子曰はく、「人書を著して恣に
 己れを議す、苟も辭塞がらずんば、豈黙して止むべけんや。
 先生にして答へられずんば、請ふ、余れ代はりて之れを折
 かん」と。仁齋曰はく、「君子は争ふ所なし。もし、彼れ果た
 して是に、我れ果たして非ならば、彼れ、我れに於いて益友
 たり。もし、我れ果たして是に、彼れ果たして非ならば、他
 日彼れその學長進せば、當に自ら之れを知るべし。小子
 宜しく深く戒むべし、學をなすの要は惟虚心平氣に己れ

が爲にするを以つて先となす、何ぞ彼れを毀り我れを立
てて、徒らに茲の多口を増さん」と。

唯この一事により、彼れが襟度の宏濶なるを知るべし。カ
ント氏のとき、ダーウイン氏のとき、皆駁撃せらるるこ

まれば、
此二語を借来乃人深あまき事
中、
た乃志あき思 神を以て難く推損

伊藤仁齋書 (流芳遺墨)

と尋常ならざりしかども、泰然として自ら守り、敢へて自ら
紛紛擾擾たる辨難の旋渦の中に投ぜざりき。自家の學說
を辨護せんがために、一一駁者と論難せんは、餘りに細心小
膽なり。是れ小人の志にして、大人君子の志にあらず。然
れども、君子は争ふ所なしといふべきにあらず、君子は争ふ

所あるべく、又争ふ所なかるべきものなり。學術に關し、道
義に關し、争はざるべからざるものある時は、正堂堂と争
ふを要するなり。仁齋のごときも宋學を排斥して古學を
主張す、是れ争ふ所あるものなり。然れども、妄りに争ふべ
からず、妄りに争はば、徒らに茲の多口を増さんこと、仁齋の
言ふ所のごとし。

湯淺常山の文會雜記卷二下に云はく、

春臺云はく、東涯は至りて温厚なる人なり。仁齋もしか
なり。但し仁齋の眊子の明かなること、謂はゆる眼光人
を射るなり。學問にねりつめて徳をなしたる人と覺ゆ。
定めて圭角ありたる人ならん。隨分やはらかなる人な
れども、極めて英氣ある人なり」と語られたりとなり。春
臺も仁齋には深く心服せり。

太宰春臺が仁齋に心服せしは、文會雜記に言ふ所のごとし。春臺もと徂徠門下にありて、矯矯たるもの、彼れが如何に徂徠と仁齋とを對照せしかを見ん。紫芝園漫筆卷四に云はく、

伊仁齋は豪傑の士なり。謂はゆる文王を待たずして作るものなり。物先生も亦豪傑の士なり。然れども、伊氏に後れて出でたり。故にその學伊氏に本づかずと雖も、伊氏を以つて嚆矢となさざる能はざるなり。

又卷六に云はく、
或人問ふ、仁齋と徂徠と孰れか愈れると。曰はく、仁齋の學、徂徠の學に及ばず。徂徠の才、尤も仁齋の企て及ぶ所にあらず。識のごときは、仁齋實にこれが嚆矢たり。徂徠超乘して上ると雖も、謂はゆる青藍に出づるものなり。

孟子曰待文王而後興者
凡心若文章傑之士
強燕文王猶與トアリ
高文 かつた、サカケ、意

青藍超乘して上ると雖も、謂はゆる青藍に出づるものなり。徂徠超乘して上ると雖も、謂はゆる青藍に出づるものなり。

大共、
馬援の文武高、奉世と名高
キは名臣也、深淵、青、ワ、ミ、テ
世、取、ミ、ト、アリ
曰、龍伯高、敦厚、周慎、ミ、テ
謙約、節儉、ウ、長、深、ヲ、愛、シ、深
ヲ、重、ム、深、ヲ、深、ト、深、ヲ、習、ム、
杜、季、良、イ、恣、性、放、シ、テ、善、ヲ、好、ム、
人、愛、ム、愛、ム、人、樂、ム、樂、ム、
長、深、ヲ、愛、シ、深、ヲ、重、ム、深、ヲ、
習、ム、
汝、深、ヲ、深、ガ、ミ、テ、深、ヲ、欲、ム、
何、ト、ト、伯、高、ヲ、深、ヒ、テ、得、ル、ハ、
尚、權、直、人、ト、ナル、ベ、シ、季、良、リ、
深、ヒ、テ、得、ル、ハ、ハ、深、ヲ、得、ル、ハ、
バ、即、鵠、刻、ミ、テ、得、ル、ハ、
ハ、可、ナ、リ、虎、ヲ、画、キ、テ、狗、ニ、
ト、シ、テ、取、ル、ハ、カ、ナ、リ、ト

其の人を教ふる所以に至りては、仁齋は君子を以つて人に望み、徂徠は豪傑を以つて人に望む。二先生の風同じからざること、なほ馬援が稱する所の伯高、季良の異なるがごときなり。二先生を學ぶもの、その得失亦なほかくのごとし。
春臺は徂徠門下にあり、而して徂徠と仁齋とは各學派を成して相對立し、殆ど天下を二分せんとする状あり。然るにこれに拘らず、春臺反りて仁齋の人物性行を欽慕すること、洵に深からずとせず。乃ち知る、仁齋の德行は反對派と雖も之れを認容せざるを得ざるまでに勢力を及ぼせるを。是れを以つて、徂徠彼れ自らも百方仁齋を攻撃するに拘らず、竊かに仁齋の道德の高きを認容せり。彼れ常に自ら曰はく、

義井、共同井也。

熊澤の知、伊藤の行、之れに加ふるに、我れの學を以つてせば、東海始めて一の聖人を出ださん。仁齋が比隣義井を浚ふるに當たり、衆と共に綆を執りて其の勞を分かつを辭せざるがごとき、節分の夜、炒豆を散じて「福は内、鬼は外」と呼びて世俗の風習に違はざるがごとき、又梵刹を過りて佛を見れば即ち拜し、敢へて之れを侮蔑せざるがごとき、皆其の故らに奇僻の行をなさず、反りて平生衆と調和して行く心あるを知るべきなり。仁齋赤貧洗ふがごとし、然れども、毫も意に介せず。孜孜として勤むる所、唯講學の一事あるのみ。彼れ自ら曰はく、於好學一事、雖聖人亦不敢讓焉。送浮屠道香師序」と蓋し誇言にあらざるなり。先哲叢談に左の一節あり。仁齋家もと赤貧にして、歲暮に糶盜を買ふこと能はず、亦

糶盜 糶 盜 糶 盜 糶 盜

謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝

謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝

謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝

謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝

謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝 謝

曠然として以つて意とせず。妻跪き進んで曰はく、家道鞠育、妾未だ嘗て堪へずとせず。而して、獨りその忍ぶべからざるものは、孺子原藏未だ貧の何物たるを解せず、人の家に盜あるを羨み、連求して已まず、妾、口能く之れを譙呵すと雖も、腸正に斷絶すと。言訖はりて涙下る。仁齋、凡によりて書を閲し、一言も之れが答をなさず、直ちにその著くる所の外套ハコを卸して以つて妻に投ず。仁齋の一生を瞥見するに、一世の師範を以つて自ら任じ、卓として群儒の表に抜きんづ。その態度、正堂堂、直に曠世の偉人と稱するに足る。仁齋は北村可昌が碣銘に、先生高尚不近利名」と云へるがごとく、心念極めて高潔にして、殆ど迂濶なるまでに當時の汚俗に接せざりき。彼れは蚤に其の負擔すべき自然の任務あることを了知し、此の任務を果

たさんとの志を立てて、如何なる周囲の困難をも意とせざりき。彼れは甚だしき窮乏の爲に絶えて動搖するがごときことなかりき。彼れその志を沮碍するものあるに拘らず、毫もその所信を曲げざりき。彼れ十年の羸疾の爲に屈することなく、歳を経るに従ひ愈研鑽の功を積みたりき。然るにこれらの困難を外にしてなほ彼れが操行を試みるに足るものありき。何ぞや、他なし、彼れが聲譽を蠹毒せんとする悪言なり。名聲の揚がる處必ず悪言の起るあり、是れ古今の常なり。彼れも亦この災を免るること能はざりき。仁齋が新年作に「近來增多口、是非埃、聖賢」と云ふも、讒誣の四方に起るるを歌へるなり。然れども、如何なる波旬も彼れが志を奪ふこと能はざりき。嘗て壁に題して云はく、

波旬誘誘 惡魔

天空海濶小茅堂、四序悠悠春色長。笑殺淵明無卓識、北窓何必慕羲皇。

乃ち彼れが胸中優に閑日月あるを知るべきなり。彼れの學説は姑く之れを置き、彼れの行爲に就いては、後世學者の自ら資すべきもの多多あるを疑はざるなり。日本古學派之哲學

十六 東路の旅 源 親行

仁治三年の秋八月十日あまりのころ、都を出でて吾妻へ赴く事あり。まだ知らぬ道のそら、山重なり江重なりて、はるばる遠き旅なれども、雲を凌ぎ、霧を分

吾雅人ヲテ教住虎ヲ進マシメ
贈ル歌
此の舟はともしんかこも
すじをえまはわもほし
なげけは、トアリキコト指ス

岡本宮 高市郡岡本寺邊

さざ波や 大津唐詩也
松

滿誓、春及朝、人、身、金、鹿
トあり、佛、教、三、而、云、フ
沙、弥、佛、道、六、十、修、業、ツ、テ、
ル、モ、一、ヲ、而、云、フ、人、ノ、歌、ハ
松、遠、在、泉、ニ
古、の、舟、を、何、に、た、と、て、船、ほ、ら、し、
舟、ヲ、行、く、舟、の、お、も、い、は、ば、ト
万、葉、集、云、ニ
幸、也、何、に、た、と、ん、船、が、い、り、
漕、ヲ、行、く、舟、の、お、も、い、は、ば、ト、
云、テ、云、リ、滿、誓、ハ、子、山、ニ、子、派、
也、シ、モ、ニ、テ、云、カ、滿、誓、ヲ、子、山、接、
川、(三、カ、ノ、一、) 意、心、佛、教、念、仙、宗、
ノ、祖、ヲ、シ、ル、人、仙、画、名、手、ニ、テ、
住、生、聖、賢、子、ノ、作、者、也、湖、上、
ノ、舟、ヲ、眺、メ、舟、伴、ノ、人、ヲ、歌、フ、
ハ、湖、ニ、ま、い、ラ、舟、ヲ、歌、フ、聖、賢、
ヲ、感、シ、テ、ウ、シ、道、ヲ、ハ、ゲ、シ、テ、ト、
イ、ハ、草、草、野、ノ、藤、原、清、輔、作、
三、見、エ、タ、ル、源、秋、行、ノ、滿、誓、
ガ、子、山、ニ、テ、和、平、と、云、フ、上、派、
ニ、カ、ル、思、ハ、深、シ、也、

こころをとむるあふさかの關。
關山を過ぎぬれば、打出濱、粟津原などきけども、未だ
夜のうちなれば、さだかにも見分からず。昔、天智天
皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の
郡に都遷りありて、大津宮を造られけりと、きくにも、
このほどは古き皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれ
なり。

さざ波や大津の宮のあれしより
名のみ残れる志賀の故郷。
曙の空になりて、勢多の長橋うち渡すほどに、湖遙か

にあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にてこの海を
望みつつよめりけん歌思ひ出でられて漕ぎ行く舟
のあとの白波誠にはかなく心細し。

世の中をこぎゆく舟によそへつつ
ながめし跡をまたぞながむる。

この程をも行き過ぎて、野路といふ處に到りぬ。草
の原露しげくして旅衣いつしか袖の雫處せし。篠
原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北
には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。
むかひの汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つなり。

洗滌 フカウヒキヤト
白氏文集
長門房田氏
香池堂
影 長孤言
波沈 密紅刺海
書紙一紙

南山の影をひたさねども、青くして洗滌長孤言たり。洲崎
ところどころに入りちがひて、葦かつみなど生ひわ
たれる中に、鴛鴨のうちむれて飛びちがふさま、葦手
を書けるやうなり。昔、都をたつ旅人この宿にこそ
とまりけるが、今はうちすぐるたぐひのみ多くして、
家居もまばらになりゆくなど聞くこそ「變はりゆく
世のならひ、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけめ」とお
ぼゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより、
荒れのみまさる野路のしのはら。

白氏文集 三詠
遠愛寺鐘 秋楓
香爐 雪松 簾看

行き暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊り
ぬ。まばらなる床の秋風、夜更くるままに身にしみ
て、都にはいつしか引きかへたるここちす。枕に近
き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の
庵の寐覺もかくやありけんとははれなり。行末遠
き旅の空、思ひつづけられて、いといたる物悲し。
都出でていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬとこの秋風。
この宿を出でて、笠原の野原打ち通るほどに、老蘇杜
といふ杉むらあり。下草ふかき朝露の霜にかはら

ん行末も、はかなく移る月日なれば、遠からずおぼゆ。
かはらじな、わがもとゆひにおく霜も

名にしおいそのもりのした草。

音に聞きし醒が井を見れば、陰暗き木の岩根より流
れ出づる清水、あまり涼しきまで澄み渡りて、實に身
にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往
還の旅人多く立ちよりて涼み合へり。かの西行が
道のべに清水流るる柳かげ、
しばしとてこそ立ちとまりけれ。
と詠めるも、かやうの處にや。

醒が井、乃武命、寤りて
テ伊吹山より下りて、水ヲ
呑ませしテ醒ませ給ひ
牙地及上は、

清水をたづぬ 柳かげ

しむれを 時雨

後京極、原原屋經行
人すまね不破の關屋の板びさし
萱屋の板びさし秋の風

風情とあけく
思ふ所

道のべの木陰の清水むすぶとて、

しばし涼まぬ旅人ぞなき。

柏原といふ處をたちて、美濃の國關山にもかかりぬ。
谷川、霧の底におとづれ、山風、松の梢にしぐれわたり
て、日影も見えぬ木の下道、あはれに心ぼそし。越え
はてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板びさし年經
にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後は
ただ秋の風」とよませたまへる歌思ひいでられて、こ
の上は風情もめぐらしがたければ、賤しき言の葉を
遣さんもなかなかにおぼえて、此處をば空しくうち

過ぎぬ。

株瀨川といふ處にとまりて、夜ふくる程に河端に立ち出でて見れば、秋の最中の晴天、清き河瀨にうつろひて、照る月なみもかす見ゆるばかりに澄みわたれり。「二千里の外の古人の心遠く思ひやられて旅の思いとど抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつつ「花洛を出でて三日、株瀨川に宿して一宵、しばしば幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつがつ遠情を前途一千里の雲に送る」など、ある家の障子に書きつくるついでに、

月夜月並

白樂天か他御無友ニ送テ詩篇一首

三五夜中新月也

二千里外故人心トアリ

故人の懐懐人

知らざりき、秋のなかばの今宵しも、

かかる旅寝の月を見んとは。東關紀行

十七 俊基朝臣の東下り 作者 未詳

俊基朝臣は先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召し捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様様に陳じ申されし趣、實にもと赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに専ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召し捕られて關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所な

元徳元年八月、土岐頼貞は、多岐見國長等、事てし、鎌倉に送られ、今、九月、俊基朝臣、亦、事てし、鎌倉に送られ、朝、治、政、懐、け、れ、元、弘、元年、朝廷、皇、山、内、親、文、親、及、日、等、と、鎌、倉、御、伏、祈、禱、を、奉、り、事、亦、在、傍、等、捕、り、て、十、七、日、に、關、東、へ、送、ら、れ、給、ふ、事、也、

れば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるるか、鎌倉にて斬らるるか、二つの間をば離れじと思ひ儲けてぞ出でられける。

落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を著てかへる嵐の山の秋の暮、一夜を明かすほどだにも旅寝となればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬ我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞあはれなる。

憂をば留めぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路

新古今集
 交野の春の櫻狩の錦を著てかへる嵐の山の秋の暮
 落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻狩
 紅葉の錦を著てかへる嵐の山の秋の暮
 旅寝となればものうきに
 恩愛のちぎり淺からぬ我が故郷の妻子をば
 行方も知らず思ひ置き
 年久しくも住み馴れし九重の帝都をば
 今を限と顧みて
 思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞあはれなる

浦にゆく一舟かへり
 身をうき船の浮き沈み
 駒もとどろと踏

を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く。身をうき船の浮き沈み。駒もとどろと踏み鳴らす勢多の長橋打ち渡り、行きかふ人にあふみぢや、世のうねの野に鳴く鶴も子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもり山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にもおいそのもりの下草に、駒を留めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。

番場醒が井、柏原、不破の關屋は荒れ果てて、猶もるも

のは秋の雨のいつかわがみのをほりなる熱田の八
 劔伏し拜み、汐干に今やなるみがた。かたむく月に
 道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末は何處ととほ
 たふみ、濱名の橋の夕潮に引く人もなき捨小船、沈み
 はてぬる身にしあれば、誰れか哀れとゆふぐれの晩
 鐘鳴れば、今はとて池田の宿に著き給ふ。元暦元年
 の頃かとよ、重衡の中將の、東夷のために囚はれて、此
 の宿に著き給ひしに、

東路の埴生の小屋のいぶせきに、

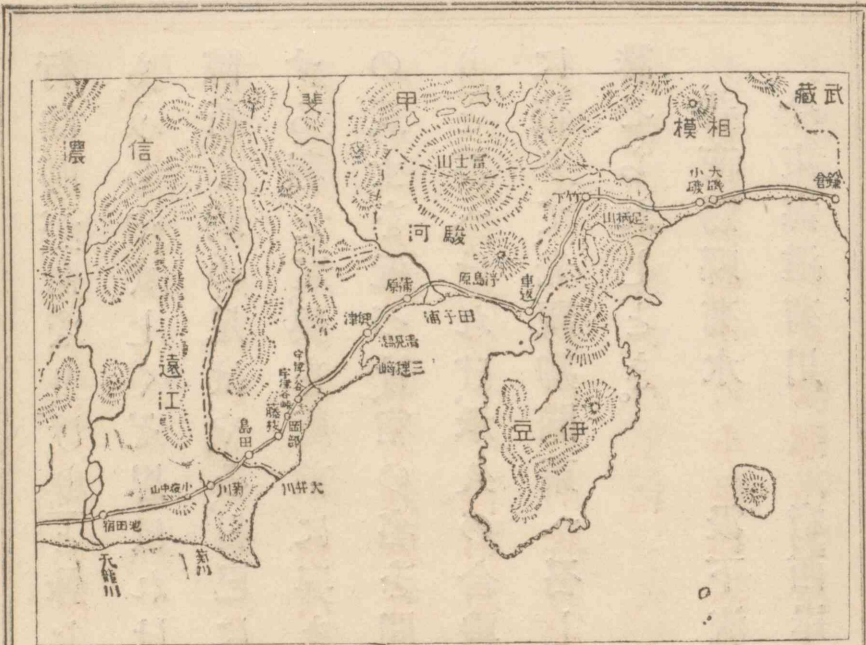
故郷いかにこひしかるらん。

新古今集
 小夜子馬鞍年こまひて
 なまかたれ、かたむく月に
 しほかみつゝえん ト歌

埴生、赤土ヲ埴ト云ル、
 赤土更所ヲイハト云フ、埴地
 といへき、故郷、ウツト云ル。

處、長者曰ふ女、伴從
 一處ナリ。

度、山谷ノ詩、
 晨鷄催不起
 擁衾聽松風
 三休詩中、
 官柳青、匹馬嘶



と處のもの詠みたり
まき平家物語涼平盛衰地ト云
 し其の古へのあはれま
 でも、思ひ残さぬ泪なり。
 旅館の燈幽かにして鷄
 鳴曉を催せば、匹馬風に
 嘶えて天龍川を打ち渡
 り、小夜の中山越え行け
 ば、白雲路を埋み來て、そ
 ことも知らぬ夕暮に、家
 郷の天を望みても、昔西

西行法師、
命なりけり、
思ふや命なりけり、
夜の中

隙行く駒の足はやみ、日已に亭午にのぼれば、餉進らす程とて、輿を庭前に昇き止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依りて、光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられしとき。

菊川、
光親卿、
宿、
光親卿、
宿、

南陽縣、
南陽縣、
南陽縣、
南陽縣、

谷水、
谷水、
谷水、
谷水、

行法師が「命なりけり」と詠じつつ、二度越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。
隙行く駒の足はやみ、日已に亭午にのぼれば、餉進らす程とて、輿を庭前に昇き止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依りて、光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられしとき。

昔南陽縣菊水 汲下流而延齡、
今東海道菊川 宿西岸而終命。

龜山殿、
龜山殿、
龜山殿、
龜山殿、

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとどまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。
いにしへも、かかるためしをきく川の
おなじながれに身をやしづめん。
大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷓首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢と思ひ續け給ふ。島田、藤枝にかかりて、岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓

業平中將宇都山崎三
都心生き備へし一封
都心生事ウテ目
駿河守宇都山崎現にも
夢にも人逢はぬなりけり

富士の根の煙のなほも立上る
上なきもの思ひなかり

田子原史

いと茂りて道もなし。昔、業平の中將の住所を覓む
とて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけり
と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。
清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の
關守にいとど涙を催され、むかうはいづこみほが崎、
興津、蒲原打ち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中
より立つ煙、上なき思ハヒに比べつつ、明くる霞に松見え
て、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や浅き、船浮きて、おり
たつ田子のみづからも浮世を遶る車返、竹の下道行
きなやむ足柄山の巔より大磯小磯見下ろして、袖に

も波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數
つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給
ひけれ。

其の日、やがて南條左衛門高直請け取り奉りて、諏訪
左衛門に預けらる。一間なる處に蜘蛛手きびしく結
ひて押し籠め奉る有様、只地獄の罪人の、十王の廳に
渡されて、頸械手枷を入れられ、罪の輕重を糺さるる
もかくやと思ひ知られたり。太平記

十八 百蟲譜 横井也有

十王
素戔嗚王 初江王
宋帝王 五官王
閻羅王 表威王
泰山王 手守王
前帝王 轉輪王
横井也乃尾初家老族并
孫左左門 世有 搦手扇
ト多シ天記 三年 分發ス
八十二才 高千能 始也

蝶の花に飛びかひたる、やさしきもののかぎりなるべし。それも啼くねの愛なれば、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ、莊周が夢もこのものには託しけめ。蛙は古今の序にかかれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。臘月夜の風静まりて遠く聞こゆるはよし。古池にとんで翁の目さましたれば、このものの事さらにも誇りがたし。蟬はただ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やや日ざかりに鳴きさかるところは、人の汗絞るこ

ちす。されば、初蝶とも初蛙ともいふ事を聞かず、このものばかり初蟬といはるるこそ大きな手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすたく五月の闇は、ただこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに、貧の學者に捕られて油火のかほりにせられたるは、このものの本意はあらざるべし。寒蟬は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過

ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。つくつくほふし
といふ蟬はつくしこひしともいふなり。「筑紫の人
の旅に死して、このものになりたり」と世の諺にいへ
りけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。
蠶の生涯は世のために終はり、火とり蟲は誰がた
めに身をこがすや。蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼く
ふ蟲は物ずきの謗となれり。
同じ寶の名によばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。
螻蛄の斧を持たるほこりよりその心いかつなり。
人の上にもこのたぐひあるべし。

蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。ただ原、吉
原を駕にのりて富士を詠めゆく人に似たり。
促織、鈴蟲、轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。
松蟲、その木にもよらで、いかでかく名をつきたるな
らん。毛生ひ、むくつけき蟲にも、同じ名ありて、松を
枯らし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛あり
て、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松
蟲の類なるべし。
蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月のころ端居珍し
き夕べ、はじめてほのかに聞きたらん、又は長月のこ

ろ力なく残りたるは、淋しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。鴉衣

師範學校
 國文教科書卷五終



明治三十六年十二月五日印刷
 明治三十七年二月廿六日訂正再版印刷
 明治三十七年二月廿九日訂正再版發行

定價各金二十八錢



大賣所

東京市日本橋區通三丁目 林平次郎
 全 神田區表神保町三番地 東京堂書店
 大阪市東區備後町四丁目 吉岡平助
 京都市東洞院三條東へ入 村上勘兵衛
 熊本市新町二丁目 長崎次郎
 名古屋市本町三丁目 川瀨代助
 金澤市片町 宇都宮源平
 仙臺市大町五丁目 藤崎祐之助
 長野市大門町 西澤喜太郎
 北海道札幌區西二丁目 富貴堂書店

編纂者 吉田彌平
 發行者 上原才一
 發行所 東京市神田區裏神保町六番地 光風館書店
 印刷者 森潤二
 印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀英舍第一工場

